
仮面ライダーカブト 1st stage

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーカブト 1st stage

【Nコード】

N7165A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

7年前、突如地球に飛来し、日本・渋谷に落下直撃した巨大隕石――通称「シブヤ隕石」――によって周囲地域は壊滅。隕石は人的にも多数の被害を与え、7年後の現在でも渋谷は復興されることも無く封鎖されている。だが、これらの災厄は終わった訳ではなく、すべての始まりにすぎなかった。

プロローグ（前書き）

この作品は、特撮好きの私がファンフィクションとして勝手に書いた物です。

同人誌に興味の無い方は読まない方が良いかも。

プロローグ

7年前、突如地球に飛来し、日本・渋谷に落下直撃した巨大隕石――通称「シブヤ隕石」――によって周囲地域は壊滅。隕石は人的にも多数の被害を与え、7年後の現在でも渋谷は復興されることも無く封鎖されている。だが、これらの災厄は終わった訳ではなく、すべての始まりにすぎなかった。

隕石落下直後より地球人類に擬態し街中を白昼堂々と活動、次々と人を殺しつつ繁殖する正体不明の宇宙生命体の人々に恐怖をもたらしていた。「ワーム」と呼ばれるその生物を滅ぼすため、人類は秘密組織「ZECT」を結成。しかしワームのもつ、目にも留まらぬ高速移動能力「クロックアップ」の前に、ZECTは敗北を重ねる。もはや最後の希望は、完成間もない武装システム「マスキドライダーシステム」のみであった。これを装備し、使いこなせる者が現れれば、ZECTはワームに対抗しうる力を手に入れられるのだ。

出会い

此処は、廃墟となった工場……。この廃工場に、一匹のサナギワームが逃げ込んだと言う情報が入った。そして、その工場の前に一人の男がやって来た……。

彼の名は、加賀美^{かがみ}新^{あらた}。

彼は、人類が結成した秘密組織「ZECT」の隊員である。

加賀美は愛用のミニ拳銃を持って廃工場に入って行く……。

「全く、何で俺がこんな事……。」

加賀美はそう呟いた。

すると、一匹のサナギワームが加賀美の前に降り立った。

「出たな！」

加賀美は、そう言っただけでワームに銃を向け、一発の弾丸を発射する。

一発の弾丸は、ワームに向かって真っ直ぐ飛んでいき、ワームに直撃したが、ワームは平気で立っていた。

「やはり一発じゃ無理か。」

加賀美は、そう言っただけで銃を連射する。銃口から飛び出した数々の弾丸は、全てワームに当たった。

カチ、カチ。

銃の弾数は底を尽きた。

「弾切れかよ……。」

加賀美がそう言っただけで、ワームは脱皮をして成虫になってしまった。

「反則だ。」

加賀美はそう呟いたが、ワームはそんな事お構いなしに、目にも留まらぬ速さで高速移動「クロックアップ」をした。クロックアップをしたワームは、加賀美の目の前まで迫って来ていたが、加賀美にはそれが見えない。

すると、どこからか一発の弾丸が飛んで来てワームに直撃した。成虫ワームは、弾丸の衝撃で加賀美から逸れて横へ吹っ飛んだ。

加賀美は、びつくりすると、瞬時に弾丸が飛んで来た方向を見た。そこには、一体のマスクドライダーが立っていた。

「待て、お前の相手はこの俺だ。」

一体のライダーは成虫ワームに向かって言った。

ワームは、クロックアップをすると、マスクドライダーに向かって行った。しかし、ライダーは銃を一発撃ち込む。

すると、一発の弾丸はワームに当たり、ワームは怯んだ。

「すげえ……。」

加賀美は、肉眼では知覚出来ないスピードで動いてるワームを、たった一発の弾丸で動きを封じたライダーを見てそう呟いた。

ワームは起きあがると、再びクロックアップをし、ライダーに接近した。

ライダーは、今度は銃を撃たず、ベルトに装着されたカブトムシの様なモノの角を起こすと、

「キャストオフ」

と、言って反対側へと倒した。

すると、ベルトから「キャスト、オフ」と言う機械音が発せられ、アーマーは瞬時に吹き飛ぶと同時に、クロックアップをしているワームに直撃した。

その後、カブトムシの背中をモチーフにした赤い鎧が見え、頭の角が自動的に起きあがると、「change beetle（チェンジ、ビートル）」と、機械音を発した。

「あれが、カブト……。」

加賀美はそう呟いた。

するとカブトは、

「クロックアップ」

と、言ってベルトの左（カブトにとっては右）のボタンを押した。

ベルトは、「clock up（クロック、アップ）」と言う機械音発生させると、加賀美の前からカブトは姿を消した。

そして、消えてから5秒後に、加賀美の目の前で爆発が起こった。

それと同時に、「clock over（クロック、オーバー）」と言う機械音と共に、加賀美の前にカブトが姿を現した。

フォームを抹殺したカブトは、ベルトに装着されているカブトゼクタを外して変身を解いた……。

すると、ZECTの隊員ではない男がそこにはいた。

「お前は一体？」

加賀美はその男に向かって言った。

「俺は、天の道を往き、総てを司る男。」

男は右手を頭上にかざしながらそう言って、どこかへ行ってしまった……。

それから言うものの、加賀美はあの男が気になって仕方が無かった。

あの男は一体……。

選ばれし者

加賀美は、一通りの少ない所で、自称・天の道を往き、総てを司る男を捜していた・・・。

「何処にいるんだ？」

と、加賀美は一人呟く。

すると、一人の男が、

「誰か捜しているのか？」

と、聞いて来た。

加賀美が振り向くと、そこには自称・天の道を往き、総てを司る男がいた。

加賀美は、

「お前は！？」

と、驚いた。

「どうした、そんなに驚いて。」

「聞きたい事がある！」

「何だ？」

「お前、何者なんだ？」

それに、そのベルト！？」

何故ZECTが最近開発したものを持つてるんだ！？」

そう言つて、加賀美は自称・天の道を往き、総てを司る男が巻いているベルト指差した。

「このベルトとは長い付き合いだね。俺が小さい頃に手に入れたものだ。」

自称・天の道を往き、総てを司る男がそう言うと、一匹の成虫ワームが襲つて来た。

自称・天の道を往き、総てを司る男は、天に手をかざした。

すると、赤いカブトムシ・・・いや、カブトゼクターが飛んで来た。自称・天の道を往き、総てを司る男は、カブトゼクターを掴もうと

するが、ゼクターはそれを避け、別の方向へ飛んで行った。
二人は、ゼクターが飛んで行った方向を見る・・・。

すると、そこにはベルトを装着した一人の男が立っており、飛んできたゼクターを掴んでいた。

男は、それをベルトに装着すると、

「変身。」

と、言った。

男のベルトからは、スーツとマスクドアーマーが出て来て男を包み込む。

ライダーになった男は、ワームに向かって一発の弾丸を発射した。
すると成虫ワームは、クロックアップで避けると、ライダーに向かって行った。

ライダーは、瞬時にキャストオフをした。

すると、マスクドアーマーは吹っ飛び、向かってきたワームにクリティカルヒットし、ワームを怯ませるが、それでもワームは起きあがるなりクロックアップして向かっていく。

「クロックアップ」

と、カブトが言いながらベルトのボタンを押すと、同時にベルトから、

「clock up」

と、機械音が発せられた。

すると、カブトの回りの時間の流れは全て止まっているかの様に遅くなった。

カブトはその空間の中を移動すると、ワームに接近した。

同時に、ワームもカブトに向かって飛んでいく。

カブトは、ワームの前まで来ると、ゼクターのボタンを順番に、

「ワン、ツー、スリー」

と、押していき、ゼクターの角を一度倒して、

「ライダーキック」

と、言うのと再び倒した。

すると、カブトから見た右足が燃えだし、カブトは回し蹴りを放った。それと同時に、ベルトからは、

「ルアイダー、キック」

と、機械音が発せられた。

ワームは、放たれたライダーキックをもろに受けて爆発をした。

その後、ベルトは、

「clock over」

と、機械音を発生させてクロックアップを解除する。

「何なんだ、アイツ・・・」

戦いの一部始終を見ていた加賀美はそう呟いた。

ワームを倒したカブトは、ベルトからゼクターが外れて飛んで行き、変身が解けた。

変身が解けた男を見た自称・天の道を往き、総てを司る男は、

「お前は？」

と言った。

男は振り向くと、

「選ばれし者だ。」

と答え、さつさと立ち去って行った・・・。

自称・天の道を往き、総てを司る男は、

「俺様がゼクターに見限られた？」

と言うと、凹んでしまった。

その様子を見ていた加賀美は、自称・天の道を往き、総てを司る男を慰めたが、自称・天の道を往き、総てを司る男は、

「慰めなどいらない。」

と言って、どこかへ行ってしまった。

それにしても、あの男は何者なのだろうか？

今回はその男について追求してみよう・・・。

選ばれし者（後書き）

すいません、作者の都合で勝手に主人公（資格者）を変えちゃいました。

男の正体（前書き）

今回は、前回出た男の正体について追求したいと思います。
て言つか、その男視点で行きます・・・。

男の正体

俺の名は黒川 慎吾、高校生だ。

最近、ワームとか言う地球外生命体が世間を騒がせている。そのせいで、登下校時は一苦労をする。

今日だって、登校時にワームが現れ、大騒ぎだった。全く、世の中変わってしまったな・・・。

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、放課後を迎えた。

教室を見渡すと、数人の生徒しか残っていない。

原因は、部活だ。殆どの生徒が部活に行ってしまう、残されているのは数人の生徒だけなのだ。

そこへ、一人の少女が俺の元へとやって来て、

「ねえ慎吾、一緒に帰ろう?」

と、俺を誘った。

彼女は霧島 真理。

真理絵は、黒川 智花に似ていて可愛く、校内では結構人気がある。その為、数人の男子から何度か告白を受けているが、当人は全く興味が無く、全て断っている。

いや、全く興味が無いと言っては嘘になってしまっだろう・・・。

俺はこの真理に誘われ、一緒に下校する事になった。

俺と真理は、高校の正門を通過した。

「ねえ慎吾、あした・・・何か予定ある?」

「いや、特に無いけど?」

「じゃあさ、どっか行こうよ!」

「例えば?」

「海なんかどう?」

「海か・・・最近行ってねえなあ・・・。

よし、海でも行くか・・・。」

真理は、「やったあ!」と、喜ぶ。

そうしている内に、俺達は交差点に来た。

「じゃあ、明日ね。」

真理はそう言つて、俺と別れた・・・。

俺は交差点を渡り、真っ直ぐ進む。

それから暫く行くと、一人の若い女性が助けを求めながら駆けだして来た。

俺は女性に聞いた。

すると、女性は怪物に襲われたと言つ。

俺は、女性に襲われた所まで案内を・・・頼むまでも無く向こうからやつて来た。

それは、緑色のサナギワームだ。

「此処は僕が食い止めます。」

そう言つて女性を逃がすと、俺はカブトゼクターを呼び、マスクドライダーへと変身をした。

変身した俺は、カブトクナイガンでワームを狙つて撃つ。

ワームは、銃弾が当たると、脱皮をして成虫ワームへと姿を変えた。成虫ワームになったワームは、クロックアップをして俺に接近して来た。

俺は、ゼクターの角を起こし、

「キャストオフ。」

と言つて、起こした角を反対側へと倒した。

すると、ヒヒロノカネ（ダイヤモンドより硬い金属）で出来たアイマーは、瞬時に吹き飛び、クロックアップ中のワームの動きを止めて怯ませる。

ワームは起きあがると、クロックアップをしてその場から逃げて行つてしまった。

俺は追いかけようとしたが、見失ってしまったので諦めて変身を解いた。

変身を解いた俺は、そのまま自宅へ帰った。

翌日、俺は真理を迎えに行った。

ピーンポーン

と、玄関のチャイムを鳴らす。

それから数十秒、扉を開けて真理が顔を出した。

「迎えに来たぞ。」

「ごめんね、行けなくなっちゃった……。」

「どうして？」

すると、真理は右足を出した。

真理の足はギプスで固定され、包帯が巻かれていた。

「その足どうしたの？」

「実は昨日、車に轢かれちゃってさ。」

それで骨折しちゃったんだ。

全治一週間だって。」

真理はそう言くと、デヘへと笑った。

「じゃあ、今回は中止だな。」

足、治ったら行こうぜ。」

俺はそう言って、真理と別れた。

が、どうしても足の事が気になって仕方が無かった。

何故なら、昨日逃げに行ったワームの足に、キャストオフした時に

吹き飛んで行ったマスクドアーマーがもろに直撃したからだ。ま、

まさかな……。

俺はそう思いながらも帰路に着いた。

真理がワーム！？

東京駅・・・。

俺は此処で、真理と待ち合わせをしていた・・・。
何故？

それは、海へ行く為だ。

お、噂をすれば・・・。

「ごめーん、慎吾。待ったあ？」

と、言いながら走って来た。

俺は真理に、

「今来た所。」

と、嘘を言った・・・って、嘘かよ！？

「それじゃ、行こつか。」

そう言つて、真理は俺を引っ張って行つた。

俺達は、切符を買つと、京浜東北線に乗り込む。

それから6分、上野駅に到着する。

そこで、常磐線に乗り換え、次の乗り換えの水戸駅まで119分。

そして、最後に鹿島臨海鉄道大洗鹿島線に乗って、大洋駅まで57分。

計3時間35分で、茨城の大洋村に到着した。

到着したのは良いが、駅周辺にはタクシーが一台も無かった。

「歩こうか・・・。」

俺達は、太平洋がある京知釜海岸^{きゅうちがまかいがん}まで歩いて行く事にした。

それから歩き出して30分が経つただろうか・・・。

ようやく太平洋が見えて来た。

「もうすぐだね。」

真理はそう言う。

が、俺はもうバテていた。

それを見た真理は、

「男の癖にだらしない無いわね。」

と、俺をからかったので、

「どうせは俺はだらしが無いですよ。」

と、言い返してやった。

それから5分、京知釜海岸を目前に控え、1体の成虫ワームが俺達の目の前に現れた。

すると、真理が俺に、

「慎吾、逃げて！」

と行った。

真理の奴、どうするつもりだ？

相手は人間じゃねえんだぞ。

いくらお前が空手をやってるからって、生身で勝てる相手じゃねえ。

「やめる真理、お前の勝てる相手じゃねえ！」

俺はそう言った。

だが真理は、

「大丈夫、私に任せて。」

と言い、真理は成虫ワームに姿を変えた。

「そ、そんな莫迦な・・・。」

と、俺は真理の姿を見て呟いた。

そう、真理はあの時にマスクドアーマーが足にもろに直撃した成虫ワームだったのだ。

真理ワームは、目の前の成虫ワームと戦っていた。

暫くすると、二匹のワームは俺の視界から消え、今度は真理ワームだけが姿を現した。

俺は辺りを見回したが、もう一匹のワームはいなかった・・・。

真理ワームは人間の姿に戻り、

「もう大丈夫よ。」

と、微笑みながら言った。

「何時からだ？」

「え、何が？」

「何時真理に擬態したんだよ!？」

そう言つて、俺はゼクターを呼んでそれを掴むと、
「変身」

と言いながらベルトに装着する。

すると、俺はベルト周辺から段々と、カブト・マスクドフォームに
姿を変えて行く。

そして変身が完了すると、「change! (チェンジ!)」と言
う機械音が発せられた。

「ま、待つて慎吾。

違うのよ。」

「違う? 何が違つてんだ?

現にお前はワームじゃないか。」

「確かに、私はワームだけど・・・その、悪いワームじゃないの。」
「どういう事だ?

俺は真理に聞いた。

すると真理は、自分が良いワームで、人々を悪いワームから守つて
いるのだと言った。

「そんなもん信じられるかよ!」

「お願いだから信じて。私が一度でも貴方を襲った事があつて?」

「ある!」

「そ、それは貴方が先に仕掛けて来たからでしょ!？」

そりゃそうだ。相手はワームなんだし。

俺は取り敢えず変身を解き、

「変な真似したらその時は容赦しないからな。」

と、言つた。

真理は、

「そんな事は絶対にしないわよ!」

と、怒りながら言つた。

「そんな事より海。忘れてないでしょうね?」

「忘れてなんかいいえよ。」

そして、俺達は京知釜海岸に向かって再び歩き出した。

真理がワーム!? (後書き)

皆さんは自分がライダーで身近な人物がワームだったらどうします？
勿論、作者は迷わず殺しますね。

でも、それが憧れの人だったら躊躇うかも・・・。

因みに、良いワームとか悪いワームとかは、私の勝手な設定です。

京知釜海岸（きゅうちがまかいがん）

俺と真理は、京知釜海岸に来ていた。

此処、京知釜海岸は、太平洋に面した海岸で、茨城県の大洋村にある。

俺達はそこに、海水浴を楽しみに来ているのだ。

「ねえ、もうちょっと沖へ行ってみようよ。」

と、真理が俺に向かって言った。

「嫌だね。それに、戻れなくなったらどうすんだよ？」

「大丈夫だって。いざとなったら私が空飛んで岸まで戻るから。それは困る。」

何せ、ワームを見ると人々は驚いて逃げるからな。

下手したら営業妨害にもつながりかねん……。

って、それは流石に無いか。

そんな事より真理は何処だ！？

俺は辺りを見回した。

すると、沖の方に真理の姿が見えた。

あの野郎……一人で沖に行ったな。

俺は、泳いで真理の所まで行った。

「遅いよ慎吾。」

「遅いじゃねえよ全く。」

「そんな事より、洞窟を見つけたよ。」

洞窟？

洞窟と聞いては黙っていられない。

俺は真理に洞窟まで案内して貰った。

洞窟は、京知釜海岸の沖から少し南に行った所に位置していた。（

実際は無いと思います。）

俺達は、洞窟に入ってみる事にした。

が、入り口には「立ち入り禁止」の看板が立っていた。
理由は、人に化ける怪物が出て悪さすると言う事らしい。
恐らく、ワームの事を言ってるんだろう。

これは良い機会だ。

中に入ってワームを殲滅しよう・・・。

俺達は、洞窟に潜り込んで行った。

中に入ると、岩の壁に小さな電球がコードに繋がれて並んでいた。
この様子からすると、かつては人が出入りしていたのだろう・・・。

真理は懐中電灯を出すと、進行方向を照らした。

一体、何時持ってきたのだろうか？

俺達は更に奥まで進む。

すると、何もない大きな広場に出た。

また、広場には人が通れるくらいの穴がいくつもあった。

真理は俺に、

「右の穴に入ってみない？」

と、誘った。

「それじゃあそうしよう。」

俺と真理は、一番右の穴に入って行った・・・。

穴に入ると、2、3列になって並べる程の広い通路になっていた。

俺達は、その通路を進んで行った。

それから暫くすると、

「うわぁ！」

と、奥の方から人の悲鳴が聞こえた。

「行ってみよう・・・。」

そう言うのと、俺達は駆けだして行った。

走り始めて数分が経過した頃、通路に人が倒れている事に気が付いた。

俺達はその人に近寄ると、安否を確認した。

幸い、男は意識が残っていた。

俺は男に、

「何があつたんですか？」

と、聞く・・・。

男は、

「足を滑らした。」

とだけ答えた。

何だ、転んだだけか。

てつきりワームに襲われたのかと思つたぜ。

俺は、「ホッ」とすると同時に胸をなで下ろした。

と、思いきや。

気付いたら俺達は、緑色の数匹のサナギワームに囲まれていた。

「おっさん、まさかあんたも？」

俺が男に言つと、そいつは成虫ワームに姿を変えた。

「真理、雑魚は任せた！」

そう言つと、俺はカブトゼクターを呼び寄せた。

カブトゼクターは、岩の天井を突き破つて俺の元へとやって来る。

俺はそれを掴むと、

「変身。」

と言つて、ゼクターをベルトに装着させ、カブト・マスクドフォー
ムに姿を変えた。

変身が完了すると、「change!」と言う機械音が発せられた。
真理は、成虫ワームに姿を変えると、次々にサナギワームを殲滅し
て行った。

俺も負けてらんねえぜ！

俺は、ゼクターの角を起こすと、

「キャストオフ。」

と言つて、角を反対側へ倒した。

すると、「cast off」と、機械音が発せられ、俺はライダー
フォームになり、マスクドアーマーは瞬時に吹き飛び、残りのサ
ナギワームと成虫ワームにクリティカルヒット！

マスクドアーマーが当たったサナギワームは爆発を起こして消滅し

だが、成虫ワームは吹っ飛んで地面に倒れた。

成虫ワームは起きあがると、クロックアップをして接近して来た。

俺は、成虫ワームが接近して来たので、

「クロックアップ」

と、言っただけでベルトのボタンを押す。

すると、ベルトから「clock up」と言う機械音が発せられ、全ての時間の流れが遅くなった。

俺は成虫ワームに接近すると、カブトクナイガンのクナイモードで攻撃をした。

攻撃を受けた成虫ワームは、地面に落ちて転がる。

そして俺は、ゼクターのボタンを、

「ワン、ツー、スリー」

と、順番に押すと、角をマスクドフォームの状態に戻し、

「ライダーキック」

と言っただけで、もう一度角を反対側に倒した。

すると、右足が燃え上がり、「ルライダーキック」の機械音と共に、俺は成虫ワームに回し蹴りを放った。

回し蹴りを受けた成虫ワームは、その場で爆発を起こした。

それと同時に、「clock over」の機械音が発せられ、クロックアップが解除された。

成虫ワームを消滅させた俺が変身を解こうとすると、真理ワームに向かって一発の弾丸が飛んできた。

真理ワームを守れ！（前書き）

この回でザビーが初登場です。
短いですが、ご堪能下さい。

真理ワームを守れ！

俺は、弾丸が飛んできた方を向いた。

すると、そこには1体のマスクドライダーが立っていた・・・。

そのライダーはザビーと言い、蜂をモチーフになっている。

「カブトか。ワームがもう一体残っているぞ。」

そう言っ、真理ワームに向かって腕に付いているゼクターから銃弾を発射する。

が、俺は真理ワームの前に回り込むと、その銃弾を身体で受け止めた。

「誰だか知らんが、コイツを殺るのだけはよせ！」

俺はザビーに向かって言った。

「ふん、お前がやらないのなら俺がやる！」

ザビーはそう言っ、キャストオフをした。

やべー！コイツ本気だ！

ザビーはクロックアップをすると、真理ワームに向かって行った。

真理ワームはクロックアップで応戦する。

クロックアップ中の二人は、もの凄い速度で洞窟の外に向かって行き、遂に姿が見えなくなっしまった。

私は洞窟から出ると、空高く飛び上がった。

そしてザビーはジャンプをして私を追いかけて来る。

私はザビーの攻撃を避け、崖の上に降り立つと、ザビーもその降り立った。

私は攻撃を仕掛けるが、ザビーの方が一枚上手で、私に蹴りを入れてきた。

私はザビーの攻撃を受けると、そのまま地面を転がっていった。

ザビーは私が怯むと、必殺技・ライダーステイングを放つ体制に入っった。

「ライダーステイング。」

ザビーがそう言うのと、腕のゼクターからタキオン粒子の小さな球が発射された。

その球は、猛スピードで私の所まで飛んで来たが、ギリギリの所でカブトが現れ、ライダーステイングをライダーキックで打ち消した。

その瞬間、大きな爆発が起きた。

俺達は、爆発が起きた瞬間にその場から逃げ出し、京知釜海岸まで戻った。

ザビーは、二人の姿を見失うと、変身を解いた……。

「次は必ず……。」

ザビーの資格者はそう呟いた。

「真理、怪我は無いか？」

俺は真理に聞いた。

「慎吾が来てくれたから平気だよ。」

「それは良かった……。」

俺はそう言っ、真理と一緒に変身を解いた。

その後、俺達は着替えを済ませると、帰路についたのは言うまでも無い。

「慎吾、今日はハラハラドキドキのスリルがあって楽しかったね。」

「バーロー、何言っただよ……。あんな事、俺はもう嫌だね。」

「でもなんだかんだ言っ、一番楽しんだのって慎吾じゃん。」

真理がそう言っ、俺達は笑った。

そうしている内に、この間の十字路にやって来た。

「じゃあ、私こっちだから。」

真理はそう言っ、別れて行った。

俺は交差点を渡り、自宅まで帰って行った。

真理ワームを守れ！（後書き）

ザビーの資格者、誰にしようかね？
てか、ザビーゼクターって、原作の設定では銃弾なんか出ませんで
したね。

カブト&元カブト

真理がザビーに襲われてから1週間後の事。

俺は此処、ビストロ・ラ・サルでアルバイトをしていた。

何故かって？

夏休みで暇だからだ。

え、宿題やれ？

そんなものは初日に終らせてしまった。

だからバイトをしているのだ。

「黒川、手が止まってるぞ？」

そう言ったのは、俺より少し背が小さい少女だった。

彼女は、日下部 ひよりと言って、笑顔の無い暗い人間だ。

ひよりは、俺より前からバイトしているらしい。

「何か言ったか？」

俺はひよりに聞いた。

「手が止まってるって言ったんだ。」

「良いじゃん、客いねえんだし。」

すると、ひよりはカウンターの向こうの椅子に腰を掛けて待っている男を指差した。

俺はその男に注文を聞きに行った。

「えと、何に致しますか？」

「いつものだ。」

男は、腕を組ながら言った。

な、何なんだ、この生意気な態度は！？

って、コイツはいつぞやカブトゼクターに見限られた男ではないか。

「あんた、良く来るのか？」

俺は男に聞いた。

すると、ひよりが、

「天道はうちの常連だ。」

と言った。

「そうか、コイツ、天道と言うのか。」

「コイツじゃない。」

天の道を往き、総てを司る男だ。」

な、何だコイツ。

自分が神だと言いたいのか？

「所で、いつものはまだか？」

天道はイライラしながら言った。

「いつものって？」

俺がそう言っていると天道は、

「もう良い。」

と言って立ち上がると、調理場へと入って行った。

「良いのかひより？」

俺はひよりに聞いた。

「放っておけ。」

放っておけてあんなね。

入ったのは客だぞ。

そんな事を考えていると、何かを作る音が聞こえて来た。

天道が何かを作っているのか？

俺は様子を見ることにした。

それから暫くすると、天道が何かを持って出てきた。

彼が持ってきたのは、タマネギのポツタラ煮だった。しかも二つ。

俺は、二つも食べるのかと思ったが、実はそうではなく、俺に試食させる為に作ったんだとか。

「俺が・・・食うのか？」

「そうだ。」

俺は、言われた通りにそれを食べてみた。

が、異常にまずく、

「まずい。」

と、言うてはいけない事を言ってしまった。

「何、俺が作ったポツタラ煮がまずいだと？」

そう言つて、天道は俺を睨み付けた。

まるで、俺に作れと言つてゐる様だった。

面白い、作つてやろう。

そして俺は調理場に入り、自慢のポツタラ煮を作つて持つてきた。

天道は奪い取ると、それを食べた。

「うまい。」

そう言つと、それを一気に食した。

「何を入れたんだ？」

天道は聞いて来た。

「それは教えられない。」

「そうか・・・。」

天道はそう行つて、渋々と歸つて行つた・・・。

つておい！

食い逃げか！？

「ひより、食い逃げされたぞ？」

「アイツは後でまとめて払う。そう言う奴なんだ。」

要するに、ツケつて奴ね・・・。

俺が後片付けをしようとする、と、「コンコン」と、店の窓を叩く音

が聞こえた。

俺は窓の向こうを見た。

すると、そこには真っ赤なカブトムシ・カブトゼクターが飛んでい

た。

「お出ましか。」

俺はそう呟くと、店を出て行つた。

店の外に出ると、ゼクターは「こつちだ」と言わんばかりに俺を誘

つた。

俺はゼクターに付いて行つた。

そして、突き当たりを右に曲がると、天道が成虫ワームに襲われていた。

「待て、お前の相手は俺だ。」

俺は成虫ワームにそう言った。

成虫ワームは俺の方を向き、俺を襲って来たが、ゼクターがそれを阻止した。

その後、ゼクターは自ら俺のベルトと合体。

すると、俺はマスクドライダーへと姿を変える。

変身が完了すると、「change!」と言う機械音を発した。

変身した俺は、カブトクナイガンガンモードにし、成虫ワームに向かつて銃弾を撃ち込む。

が、成虫ワームはクロックアップして避けた。

俺は、カブトクナイガンをしまうと、ゼクターの角を反対側へ倒してキャストオフをした。

「cast off...change beetle.」と、機械音が発せられる。

「クロックアップ。」

そう言って、俺はクロックアップをした。すると、全ての時間の流れが遅くなった。

俺は成虫ワームに近付き、パンチやキックを繰り返す。

成虫ワームは、その場で怯んだ。

俺はその隙にゼクターのボタンを、

「ワン、ツー、スリー」

と、順番に押して行き、ゼクターの角をマスクドフォームの状態に倒して、ライダーフォームの位置に戻す。

俺の右足は燃え上がり、「ルアライダーキック」と言う機械音と共に成虫ワームに回し蹴りを放った。

ライダーキックを受けたワームは爆発を起こして消滅した。

「clock over.」

と、機械音が発せられ、クロックアップが解除された。

「お前が次の資格者か？」

と、ワームを倒した俺を見て言った。

どうやら天道は俺の顔を覚えていなかった様だ。

まあ、どうでも良いけどな。

「俺じゃ何か不満でも？」

「いや、そんな事は言っていない。ただ、資格者にしては随分と若いなと思っただけだ。」

あそうですか。

俺は変身を解いた。

「あんたも若いだろ。いくつだ？」

「21・・・あんたは？」

「俺は、18だ。」

「高校生か？」

「そうだが何か？」

俺はそう言っ

て、「じゃあな。」

と、天道と別れた。

天道と別れた俺は、サルに戻って残りの仕事をちゃっちゃと片づけて家路に着いた・・・。

カブト&元カブト（後書き）

この話で、原作の主人公である天道総司が慎吾の作ったポットラ煮を食べて「うまい。」と言った所がありましたね。

そして天道は慎吾に「何を入れたのか」と聞いた。

実は、慎吾は天道のポットラ煮に味噌を付け加えただけなのです。

因みに、ポットラ煮の作り方は、テレビ朝日の仮面ライダーカブトの公式サイトに載っています。

参照：<http://www.tv-asahi.co.jp/kabuto/>

カブトvsザビー（前書き）

ザビーとの運命のバトル。

カブトはザビーに勝てるのか！？

カブトVSザビー

「何、カブトがワームに荷担？」

と、加賀美 陸は三島に言った。

「はい、ザビーの資格者がそう言っています。」

「どうやら、事態は悪い方向に進んでいる様だ……。君、ザビーの資格者にカブトを抹殺する様に命じておきなさい。」

「はっ！」

ジリリリリリリリリリリ

と、目覚ましが鳴る。

俺はベッドから起きあがると、目覚ましのスイッチを切った。

そして、洗面所に向かい、顔を洗い、歯を磨き、朝食を摂り、バイトの準備をする。

と言っても、手ぶらだな。

「じゃあ俺、バイト行って来るわ。」

と、母さんに言い、自宅を出てビストロ・ラ・サルに向かった。

「今日は早いな。」

ひよりは言った。

「ああ、今日は俺の中学の時の担任が来るからな。」

「矢車って奴か？」

「ああ。」

矢車……。彼は俺の中学の時の担任だ。

それにしても先生、来るの遅いな……。

「ひより、悪いんだけど、迎えに行って来るわ。」

そう言っつて、俺はサルを後にした。

そして、向かった先は矢車先生の自宅。俺は、玄関のチャイムを鳴らした。

しかし、先生は出て来なかった。

きつと、もう出てしまったのだろう。

俺は、諦めてサルに戻る事にした。

すると、一匹の成虫ワームが現れた。

「俺とやろうってか？」

俺がワームに言つと、一発の弾丸が飛んできて成虫ワームに当たった。

俺が弾丸の飛んできた方を見ると、そこには、以前に真理を殺ろうとしたライダー・ザビーが立っていた。

ザビーは、

「助けてやるから逃げる。」

と、言つた。

俺は、

「助けなどいらない。」

と言つて、カブトに変身をした。

ザビーは俺を見て、

「カブト！？」

と、叫んだ。

俺は、成虫ワームを抹殺した。

すると、ザビーはいきなり俺を攻撃して来た。

「上からの命令だね。カブト、お前を抹殺する。」

何だと？

ザビーは、クロックアップすると、俺に接近して来た。

俺は、キャストオフをすると、クロックアップした。

すると、全ての時間の流れが遅くなる。

俺は、ザビーに接近して、パンチやキックをする。

しかし、俺の攻撃はザビーには全く効いていなかった。

「何者だあんた？」

俺は聞いたが、ザビーは答えずに戦いに専念している。

仕方無い、少し強引だが、一気に終らせるか。

そこで俺は、

「ワン、ツー、スリー」

と、ゼクターのボタンを押し、角を倒してから戻し、ライダーキックを放つ。

が、寸前の所で避けられてしまった。

その後、両者はクロックアップが解除された。

ザビーは、

「時間が無い。勝負はお預けだ。」

そう言っで、どこかへ行っでしまった。

俺は、変身を解くと、サルに戻った。

「黒川、お前に客だ。」

ひよりはそう言う。

店内を見回すと、一人の男が席に座っていた。
彼が矢車だ。

「先生、お久しぶりです。」

「おお、黒川か。久しぶりだな。」

俺と矢車は暫くの間、語り合った。

カフトVSザビー（後書き）

ザビー、一体誰なんでしょうね？

それはそうと、次回はいよいよ天道復活です。
乞御期待！

天道復活（前書き）

お待ちかね、世界の宝である天道 総司の復活です。
ご堪能下さい。

天道復活

ビストロ・ラ・サル。此処に、一人の男がいる。
男の名は、天道 総司。その名の通り、天の道を往き、総てを司る男だ。

他人から見れば、変な奴に見えるかもしれない。
いや、実際そうだ。
ん、誰か来た様だ。

「天道、ZECTがまた新しいマスクドライダーを完成させたんだ。」

加賀美は言った。

「ほお。」

「それで、ZECTはお前を資格者として指名してる。やってみないか？」

「断る。」

天道はそう言った。

「何でだよ？ライダーとして復活するチャンスなんだぞ！？」

「俺は一度、カブトに見限られてる。どうせまた、選ばれないに決まってる。」

天道がそう言うと、

「解ったよ。もう頼まない。」

加賀美はそう言っ、サルを出て行ってしまった。

俺はその一部始終を見ていた。

そこへ、ひよりが来て、

「黒川、この間注文したオリーブオイルを工場に取りに行ってきた。くれ。」

そう言い、俺に金を渡した。

俺は、サルを後にし、工場にオイルを取りに行った。

「あの、サルから注文したオリーブオイルを取りに来ました。」
「遠い所ご苦労さん。」

だが、お前は生きては帰れない。」
そう言つて、工場のオッサンは、成虫ワームに姿を変えた。
面倒な事になった。

俺は、ゼクターを呼び、変身をする。

「change」

機械音が発せられる。

変身を終わると、俺はキャストオフをした。

すると、アーマーが吹き飛ぶ。

ワームは、積んであったオリーブオイルの箱の裏に隠れた。

その後、ワームはその箱を俺に向かって放り投げた。

俺は瞬時にクロックアップをする。

そして、全ての時間の流れが遅くなった。

すると、オリーブが落ちるのが止まり、車の動きが遅くなった。

「ぶっ殺す！」

俺はワームに向かって言うと、クナイを手にし、ワームに向かって
駆け出した。

ワームもクロックアップで応戦する。

俺は攻撃をするが、ワームはそれを避けて反撃をする。

俺は、ワームに吹っ飛ばされ、数メートル先で倒れた。

すると、何者かが現れ、

「お婆ちゃんが言っていた。」

戦いはへそでするものだ。

俺の戦い方をよく見ておけ。」

と言い、ワームに接近して行った。

接近したそいつは、腰にベルトと「ヘラクレスオオカブト」の格好
をした赤いゼクターがあり、胴が赤く、鋭く尖った長い角と短い角
が生えていた。

恐らく、モチーフはヘラクレスオオカブトだろう。

カブトである俺からすれば、そいつは兄弟みたいなもんだ。

ヘラクレスがモチーフのライダーは、ワームにラッシュを繰り返す。ライダーの攻撃を受けたワームは、手も足も出なかった。

ライダーは、隙を突くと、ワームを空中に放り投げた。

そして、ゼクターのボタンを、

「ワン、ツー、スリー」

と、順番に押して行き、ゼクターの角を反対に倒し、また元に戻す。すると、2本の角が燃え上がり、

「ライダーヘッドクラッシュ！」

と、機械音が発せられると、ライダーは飛び上がり、頭の角でワームを貫く。

貫かれたワームは、空中で爆発をして消滅した。

ワームを倒したライダーは、

「clock over」

と、機械音を発生させて降りて来た。

そして、ライダーは落ちてくるオリーブオイルをキャッチ、他のオリーブはそのまま地面に落下して割れた。

俺はクロックアップを解除し、そのライダーに歩み寄った。

「何者だあんた？」

そう聞くと、そいつは変身を解いた。

「天道 総司。何度も言わせるな。」

「天道……」

俺はそう呟くと、変身を解いた。

「まあ何だ。その、助かったよ。」

「助けた訳では無い、勘違いするな。」

すると、天道はそう言ってオリーブオイルを持ったまま去って行ってしまった。

俺は、ただ呆然と、そこに佇んでいた……。

気が付くと、夕方になり、日が暮れ始めていた。

俺は、サルに戻った。

「遅い！今までどこにいたんだ？」

と、ひよりは言った後、

「お前の後に天道を行かせて正解だった。」

と、言った。

その後、俺はひよりから長時間の説教を受けたのは言っまでも無い。
それにしても天道の奴、どうしてライダーに？

天道復活（後書き）

どうしても良いけど、ザビーって誰なんだよ!？

海外旅行

俺は今、海外旅行の為に、教師や同学年の生徒共とアメリカ合衆国に来ている。

そして此処は、そのホテルの一室。

俺が格闘技術の本を読んでいると、一人の男が声を掛けてきた。

彼の名は、霧島 光太郎。彼は、真理の双子の兄で、俺の友人だ。因みに、こいつはただの人間だ。

「何だ？」

俺は霧島に聞く。

「度胸試し、始まるぜ。」

度胸試し・・・先日、女子共が総合の時間にやりたいと言った為に、実行する事となった。

「もうそんな時間か。」

そう言つて、俺は本を綴じて立ち上がった。

俺達は、ホテルを出ると、今にも何か出そうな空気の雑木林に向かい、その中に入つて行つた。

中に入ると、殆どの生徒が集まっていた。

俺たちがその集団に紛れ込むと、責任者が前に出て、

「今から男女ペアになつて、この先にある小屋に行つてある物を取つて来て貰います。途中、他のペアの人を邪魔するのもありです。」

と、ルールを説明して、

「それじゃあ男女のペアを作つて下さい。」
と、言つた。

更に、責任者は、

「好きな人を誘つてペアしても良い。」
と、付け足した。

ったく・・・何でこの俺様が度胸試しなんかしなくてはならないんだ。

そんな事を考えていると、真理が俺の所へ来て、

「ペア組もう？」

と、言つて来た。

「何でだよ？」

「何となくだよ。」

「まあ、良いか。」

俺はそう言つと、真理とペアを組んだ。

そして、小屋を目指して歩き出した。

「慎吾、何か気味悪いよ。」

「ワーム如きが何怖がつてんだよ？」

「ワームだつて怖いものくらいあるわよ！」

と、俺たちは痴話喧嘩をしていた。

そうしている内に、俺たちは一番乗りで小屋の前までやって来た。

その小屋は、二人か三人が布団敷いて眠れるくらいの広さだった。

つまり、ものすごく小さい。

「私たちが一番みたいね。」

そう言つと、真理は小屋に入つて行つた。

そして俺も小屋に入る・・・。

小屋に入ると、物置の状態になっていた。

どうやら、これは物置らしい。

俺たちは小屋の中を調べた。

すると、気になる箱を見つけた。

その箱には、

「この箱を開け、中の物を持ち帰った者には、最高のプレゼントをしよう。」

と、書いてあった。

恐らく、この中の物が「ある物」だろう。

俺達は、その箱を開ける事にした。

が、箱はびくともしなかった。

「開かないね。」

真理はそう言った。

俺は、面倒になったので、カブトゼクターを呼び寄せ、カブトに変身をした。

「ちよ、何するの!？」

真理は驚いて聞く。

「どいてろ、箱を破壊する。」

「中の物、大丈夫かな？」

そう言つて、真理は退いた。

俺は、カブトクナイガン・ガンモードで開かずの箱を攻撃する。

しかし、開かずの箱は、ヒヒロノカネと言うマスクライダーに使われているのと同じ物質で出来ていた為、びくともしなかった。

「何で壊れねんだよ!？」

俺は開かずの箱に対してぶちキレていた。

「慎吾、落ち着いて。」

「これが落ち着いていられるかあ!」

俺はカブトクナイガンを連射しまくった。

そしてついに、ヒヒロノカネで出来た箱はぶっ壊れた。

すると、中からカブトのベルトと同じデザインのベルトが出てきた。

俺は変身を解くと、

「何故ベルトがこんな所に……。」

と、呟いた。

「と、兎に角、持って帰りましょ。」

「そうだな。」

俺はそれを取り上げると、スタート地点まで戻った。

海外旅行（後書き）

アメリカに何故ベルトが！？

雌カブト（前書き）

あの箱に入っていた謎のベルト。
その正体とは！？

雌カブト

俺たちは、例のベルトを持って、スタート地点まで戻って来た。

「あの、それらしい物を持って来たんですが。」

俺は責任者に言った。

「こ、これよ！やつと見つけたわ！」

と言って、責任者は、

「持って来てくれてありがとう。」

と言う。

「あの、プレゼントと言うのは？」

「あ、いけない。忘れていたわ。」

そう言うのと、責任者は成虫ワームに姿を変え、

「貴方達に最高の墓場をプレゼントしてあげるわ。」

と言った。

「お前、最初からこのベルトが目的だったのか？」

「そうよ。」

「お前たちの目的は何なんだ？」

俺はそう聞いたが、成虫ワームはいきなり溶解液を吐いて来た。

俺は液を避けそこなったが、真理が前に出て俺を庇った。

「生身で私に敵う相手はいなくてよ？」

「それはどうかしら？」

真理はそう言うのと、成虫ワームへと姿を変えた。

「び、ビートルワーム！？」

成虫ワームは言った。

ビートルワーム・・・今更になって紹介するが、ビートルワームは真理に擬態してるワームで、カブトムシがモチーフ。

「貴方、どうして人間を守るの？貴方だってワームでしょ？」

成虫ワームは、真理ワームに言う。

「貴方、何も知らないのね。ワームにも人を守る者がいるのよ。」

真理ワームは、成虫ワームに言った。

「じゃあ試してみようかしら。」

そう言つて、成虫ワームはクロックアップをして俺に向かって来るが、真理ワームもクロックアップして応戦する。

でも、俺にその様子は見えない。

俺は、カブトゼクターを呼ぶと、カブトに再び変身。

「change！」

と言う機械音が発せられる。

俺は、キャストオフをすると、マスキドフォームからライダーフォームへと移行した。

更に俺は、クロックアップをし、カブトクナイガンで押されている

真理ワームを援護した。

「慎吾、ありがとう。」

真理ワームは、そう言つて体制を立て直した。

攻撃を受けた成虫ワームは、

「カブト!？」

と、驚きながら言った。

奴は何を知っている？

「お前、マスキドライダーシステムを何処まで知り尽くしている？」

俺はワームに聞いた。

「これから死ぬ者に答える筋合いは無いわ。」

ワームは、そう言つて俺を攻撃して来た。

俺は、ワームの攻撃を避け、反撃をした。

攻撃を受けたワームは、そのまま地面に叩き付けられたが、直ぐに

起きあがった。

起きあがったワームは、人間に擬態した。

俺は人間の姿に変えたワームに、

「勝てないと見て諦めたのか？」

と、言った。

それに対してワームは、

「まさか。」

と、笑いながら言った。

そして、ワームは俺が渡したベルトを腰に巻いた。
何をするつもりだ？

ワームは、右手を天にかざした。

すると、雌^{めす}のカブトムシをモチーフにした赤いゼクターが飛んできた。

ワームはそれを掴むと、

「変身！」

と言って、ゼクターをベルトに装着した。

ゼクターを装着したワームは、マスクドライダーに姿を変え、

「change！」

と言う、機械音を発した。

変身直後の姿は、俺のマスクドフォームと同じ格好をしていた。

「カブトムシカブトって所か。」

俺はそう呟いた・・・。

雌カブト（後書き）

あのベルトに雌カブトをモチーフにしたゼクター。
一体どんな力を？

最強コンビ

カブトに変身したワームは、ゼクターの短い角を反対側に倒してキヤストオフをした。

キヤストオフが完了すると、

「change female beetle」

と言う機械音を発生させた。

単語からすると、雌カブトと言う意味だ。

まあ、ゼクターの形が雌カブトだからな。

「ほお、その姿で俺とやるのか。」

俺がそう言つと、

「私はやらないわ。」

と、ワームが言つた。

「やらない？」

「貴方とやるのは、そのビートルワームよ。」

雌カブトが言つと、俺のゼクターと雌カブトのゼクターが共鳴をした。

何が起こっている？

俺は、何が何だか解らなかったが、雌カブトに殴りかかった。

が、ギリギリの所で俺の身体は言うことを聞かなくなった。

「殴れない!？」

俺はそう言つと、雌カブトは、

「貴方に私は殴れないわよ。」

と言つた。

俺は、

「どう言つ事だ？」

と、聞いた。

すると雌カブトは、カブトゼクターの能力について語つた。

その能力とは、雄と雌が揃つた時、凄い力を発揮すると言う事だ。

更に、雄のゼクターは、雌力ブトに攻撃しようとする、強制制御機能が働いて動きを止めると言うのだ。

それだけでは無い、雌力ブトが雄力ブトに命令すれば、雄力ブトは資格者の意志とは裏腹に、その命令を実行するらしい。全く、厄介な能力だ。

「さて、お話はこれで終わりにして、早速戦って貰いましょうかね。」

雌力ブトはそう言った。

俺は断ったが、

「無駄よ。さあ、ビートルワームと戦いなさい！」
と、命令する。

すると、俺のゼクターが共鳴をして、俺の意志とは無関係に動きだし、真理ワームに攻撃を仕掛けた。

俺は真理ワームに、

「逃げる！」

と言った。

真理ワームはその場から逃げ出す。

が、俺はそれを追いかけた。

真理ワームは必死に逃げ、俺はそれを何処までも追いかけた。

そして、ついに俺は、真理ワームを取捕とつかまえ、その場に抑え付けた。

真理ワームを抑え付けた俺は、ラッシュ攻撃をする。

真理ワームはラッシュを受け、身動きが取れないでいた。

「慎吾、やめて！」

真理ワームはそう言うが、俺は攻撃を続ける。

それから暫くすると、クロックアップが自動的に解除され、時間の動きが元に戻った。

俺の動きが遅くなると、その隙に真理ワームは逃げ出した。

「何してるの！？早く追いなさい！」

雌力ブトは俺にそう言った。

俺は再度クロックアップをすると、言われた通りに追いかけた。

真理ワームがそれに気付くと、雌カブトの前に回り込み、

「良くもやったわね。」

と言って、雌カブトのゼクターを蹴り飛ばし、ベルトから無理矢理外した。

すると、雌カブトは変身が解け、俺の身体は言うことを聞く様になった。

「へっ、助かったぜ！」

俺はそう言っていると、変身が解けたワームに接近し、腰に巻いてあるベルトを奪い取り、真理ワームに渡した。

「返しなさいよ！」

ワームはそう言った。

「お前みたいな奴にあのベルトは渡せない。」

俺がそう言っていると、人間姿のワームは成虫ワームに姿を変えた。

そして、成虫ワームはクロックアップをして攻撃をして来た。

俺は、素早く身をかわし、成虫ワームに反撃をする。

反撃を受けたワームは、

「くっ、ベルトさえあれば！」

と、言った。

この期に及んでまだベルトを欲しがるか。

「だったらくれてやるよ！身体を蝕む地獄と言う名のベルトをな！」

俺がそう言っていると、真理ワームが人間の姿に戻り、ベルトを腰に巻き、ゼクターを呼んだ。

真理はそれを掴むと、ベルトに装着して変身をした。

真理はマスクドライバーに姿を変えると、直ぐにキャストオフをしてライダーフォームに姿を変えた。

「どうやら形勢逆転だな。」

俺は成虫ワームに言った。

すると、成虫ワームは逃げ出した。

俺と真理はそれを追いかける。

「待てよ、逃げてるばかりじゃ何にもならないぜ。」

俺は逃げるワームを挑発した。

挑発されたワームは、逃げるのをやめると攻撃をして来た。
が、俺は素早く避け、ワームを怯ませる。

そして、真理がゼクターのボタンを、

「ワン、ツー、スリー」

と、順番に押して、ゼクターの角を倒し、元に戻る。

すると、俺のゼクターと真理のゼクターが共鳴を始めた。

「何が起こった!？」

と、俺が思わず叫ぶと、

「究極奥義よ。」

と、成虫ワームが言った。

「ほお、そう言う事か。」

と、俺は一人納得すると、

「ワン、ツー、スリー」

と、順番にボタンを押し、ゼクターの角をマスクドフォームの状態にし、元の位置に戻る。

すると、真理カブトの身体が光の球となり俺の元へやって来る。

俺はそれを、サッカーボールを蹴るかの様に成虫ワームに向かって蹴り飛ばした。

蹴り飛ばした球は、もの凄いスピードで成虫ワームに向かって飛んで行き、成虫ワームにクリティカルヒット。

球が当たったワームは、爆発をして消滅し、光の球は真理カブトの姿に戻った。

その後二人は、

「clock over」

と、機械音を発してクロックアップを解除した。

「終わったな・・・。」

そう言つと、俺達は変身を解いた。

その後、俺達はホテルに戻り、皆の帰りを待った。

最強コンビ（後書き）

次回はいよいよザビーの正体に迫ります。

それと、後で解った事なのですが、実際の雌カブトに角は付いておりません。

その所、誤解しないで下さい。

ザビーの正体（前書き）

いよいよザビーの正体が明らかに！

ザビーの正体

楽しい海外旅行も終わり、俺は日本に帰って来ていた。

俺はバイトの為、ビストロ・ラ・サルに来ていた。

「黒川、眠そうな顔してるけど、何かあったのか？」

ひよりがそう聞いてきたので俺は、

「時差ぼけだ。」

と、言った。

「何で時差ぼけなんか？」

「昨日まで海外旅行に行ってたんだ。」

俺はひよりに言った。

すると、

「だったら帰れ。」

と、天道がやって来て言った。

「天道！？一体、何時の間に！？」

「今来た所だ。」

そう言っていると、何かを作り始めた。

「何を作ってるんだ？」

「サバの味噌煮だ。食べるか？」

天道はそう言う。

俺は天道に、

「食べる。」

と、言った。

それを聞いた天道は、黙々と料理に集中する。

そして、漸く天道ご自慢のサバの味噌煮が出来上がった。

天道は、それを客席に持って行くと、席に座って食べ始めた。

それに釣られ、俺も天道が作ったサバの味噌煮を天道の横に持って行き、そこに座って食べ始めた。

「うまい。何だこの味は？」

天道、今度俺に作り方教えてくれ。」

「断る。」

「な、何でだよ？」

「ポツタラ煮。」

天道はそう言った。

俺はそれを聞いて思い出した。

- - - - -

「何を入れたんだ？」

天道は聞いて来た。

「それは教えられない。」

「そうか・・・。」

- - - - -

「冷たいな、あんた。」

「それより、お前の作ったポツタラ煮の秘密が解った。」

「ほお。言ってみる。」

すると天道は、

「味噌を入れたな。」

と、言ってから、

「お婆ちゃんが言っていた。

誰にもわからないように隠し味をつけるのは楽しい。

だが、それを見つけるのはもっと楽しい。」

と、天道語録をぶちかました。

それよか、俺には気になる事がある。

それは、天道が何故ライダーになったのかと言う事だ。

俺はその事を天道に聞いてみた。

「俺を誰だと思っている？」

俺様だぞ。この世界で優秀でNo.1の俺をゼクターが選ばない筈が無い。」

「待て、世界一はこの俺だ。」

「いや、俺様だ。」

「俺だ。」

「俺様だ。」

するとひよりが、

「お前らしい加減にしろ。」

と、仲裁に入った。

「わーったよ！」

俺はそう言っと、サバの味噌煮を完食させると、片づけて店の入り口に向かった。

「黒川、何処へ行くんだ？」

「帰る！それと天道、今までのツケ12、000円分、バイトで払っておけ！」

俺はそう言って、サルを出て行つた。

とは言つたものの、家に帰る気にはなれない。

こういう時は、ワーム退治だな。

俺は、ワームを捜して歩き出した。

が、こういう時に限って、ワームは一匹もない。

毎日がこうであれば良いのに・・・。

それから暫くすると、二匹のワームを発見した。

その内の一匹は成虫ワームだった。

良く見ると、二匹のワームは、一人の男を囲んでいた。

矢車だ。矢車がワームに囲まれている。

俺は、ゼクターを呼んで変身をした。

そして、サナギワームをカブトクナイガンで消滅させる。

その後、俺はキャストオフをして、ライダーフォームになる。

キャストオフが完了すると、

「change beetle。」

と言う機械音を發した。

「矢車先生、逃げて！」

俺は矢車に言っと、クロックアップをした。

それに対して、ワームもクロックアップをした。

俺は、ワームにラッシュを掛け、怯んだ隙にライダーキックを発動させ、ワームを消滅させた。

「clock over」

と、クロックアップが解除された。

「カブト!？」

矢車がそう言うのと、ザビーゼクターが飛んできた。

矢車はそれを掴むと、ザビーに変身した。

嘘だろ。

先生が、ザビーだなんて・・・。

「カブト、俺はお前を倒す!」

そう言つて、ザビーはキャストオフをした。

「cast off...change wasp」

と、機械音が出る。

「どうしてもやる気か？」

俺は聞く。

「お前が何と言おうと俺は殺る。」

「面白い。」

俺はそう言つて、クロックアップをした。

それに対し、ザビーもクロックアップをする。

俺とザビーは、互いに近付くと、本気で殴りあった。

「強いな、あんた。」

俺がそう言つとザビーは、

「強いんじゃない。お前が弱いんだ。」

と、言った。

プチン!

この瞬間、俺の堪忍袋のおが切れた。

「俺を甘く見るな。」

俺がそう言つと、雌カブトゼクターと、ビートルワームが飛んできた。

ビートルワームは、真理の姿になると、カブトゼクターを掴んだ。

「変身！」

真理はそう言っ、ゼクターをベルトに装着して、カブトに姿を変えた。

変身した真理は、直ぐにキャストオフをしてライダーフォームになると、

「change female beetle」

と、機械音を鳴らした。

「クロックアップ。」

真理はクロックアップをした。

「ダブルカブトか。」

ザビーはそう言っ、真理だけを狙った。

真理はザビーの攻撃を受ける。

ザビーは、ラッシュを掛ける。

俺はそのザビーにカブトクナイガン撃つ。

カブトクナイガンからは、一発の弾丸が発射され、真っ直ぐ飛んでいくとザビーに当たった。

「真理には指一本触れさせない。」

そう言っ、俺はカブトクナイガンでザビーに連射する。

ザビーは連射攻撃を受けると、その場で怯んだ。

真理はその隙に、ゼクターのボタンを押し、ゼクターの短い角を倒すと、元の位置に戻す。

すると、俺のゼクターが共鳴をする。

俺はゼクターのボタンを、

「ワン、ツー、スリー」

と、順番に押すと、ゼクターの角を倒し、

「ライダーシユート。」

と、言っ、角を元に戻す。

それと同時に、俺の右足は燃え上がり、真理は光の球となって俺の前まで来る。

俺はそれを、ザビーに向かって蹴り飛ばした。

ザビーその攻撃を受けると、爆発を起こし、その場で倒れた。倒れたザビーは、クロックアップを解除し、変身を解いて矢車に戻った。

俺達もクロックアップを解除すると、変身を解いた。

「く、黒川!？」

と、矢車は言った。

俺は黙ってそこを離れた。

その後、俺は家路に着いた。

ザビーの正体（後書き）

ザビーって、矢車が資格者だったんですね。
と言う事は、ザビーに見限られる？

Z E C T

「ザビーがカブトに倒されました。」

と、三島。

「うーん。」

と、加賀美 陸が唸って、

「カブトをZ E C Tに招待しよう。」

と、言った。

「カブトはワームの味方・・・宜しいのですか？」

「そうじゃない。ビートルワームを捕獲するんだ。」

「分かりました。」

三島はそう言って、加賀美 陸と別れた。

「天道！」

一人の男・加賀美 新が、ビストロ・ラ・サルで天道を呼ぶ。

「どうした？」

「天道、Z E C Tに入ってくれ！」

「断る！」

「何でだよ！？」

「Z E C Tに俺が入る隙間など無い。俺の器が広いからな。要するに、狭い風呂には入れないと言う事だ。」

天道がそう言くと、加賀美は凹んでしまった。

「あの、Z E C Tって何です？」

俺は加賀美に聞いた。

「き、君には関係無いだろ。」

「待て加賀美。教えてやれ。」

すると加賀美は、天道の耳元で、

「ライダーでも無い奴に教えられるかよ。」

と、小さい声で言った。

だが、俺の恐ろしい地獄耳はそれを聞き逃さなかった。

「ほお、ライダーなら教えてくれるのか。」

俺は加賀美にそう言った。

「そう言う事だ。教えてやれ加賀美。」

「お、教えてやれって・・・天道、何か知ってるのか？」

「ザビーを倒したカブトがそいつだ。」

天道は加賀美に言った。

「そんな莫迦な！彼は高校生だぞ？」

と、加賀美は半笑いで言った。

「嘘じゃないっすよ、ほら。」

俺は腰のベルト加賀美に見せびらかした。

「うわっ、何で君が持ってた？」

「加賀美、忘れたのか？俺と二回目に出会った時の事を。」

天道はそう言った。

加賀美は、その時の事を思い出した。

「って、て事は！君が天道の資格を奪い取った！？」

「奪い取った？」

失礼な・・・ゼクターが世界一の俺を選んだのだ。」

「待て黒川。」

言った筈だぞ、世界一はこの俺様だとな。」

俺と天道が口喧嘩を始めると、

「付き合ってたらんねえよ・・・。」

と、加賀美が一人呟いた。

「面白い。その勝負、乗った。」

俺は、天道が言う勝負を引き受けた。

その勝負とは、ボウリングだ。

「加賀美、近くにボウリング場無いか？」

天道は加賀美に聞く。

「ボウリングなんてやってどうすんだよ？」

と、加賀美は聞く。

「誰が世界一かを決めるんだ。」

俺は加賀美に言った。

「そんなの、どっちだって良いだろ……。」

そう言つて、加賀美はサルを出て行つた。

「何だよアイツ……本来の目的を忘れてるな。」

俺がそう言つと、

「同感だ。」

と、天道が言つて意気投合した。

珍しい事もあるんだな。

所で、ZECTって何!?

俺は天道に聞いてみた。

すると天道は、

「ワームを倒す為に人類が結成した秘密組織。マスクドライダーシステムもそこで作っている。」

と、言つた。

「それで、ZECTに入ると何かメリットでも?」

「ライダーとしてZECTに入ればZECTに狙われる事が無くなる。入ったらどうだ?」

「嫌だね。」

俺が天道と話していると、カブトゼクターが飛んで来た。

「どうした?」

俺はゼクターに聞いた。

すると、ゼクターは空高く昇り、

「ZECT、ビートルワーム捕獲」

と、空中に見えない文字を描いた。

「ZECTはワームなんか捕獲して何を企んでいるんだ?」

天道はそう言つた。

「カブト抹殺。」

「何?」

「ZECTは真理を捕獲して俺を抹殺しようとしている。」

「誰だそれ？」

「ビートルワーム……。ZECTは俺がワームに荷担したと思っているんだ。」

「助けに行くぞ。」

天道はそう言った。

すると、カブトゼクターが、ついて来いと言わんばかりに俺達を誘った。

俺達はゼクターについて行くと、ZECTへとやって来た。

「此処がZECT……。」

俺はそう呟いた。

天道は、一人ZECTに入って行く……。

「ま、待てよ。」

そう言つて、俺もZECTに入った。

真理、何処に閉じこめられているんだ……。

マスクドライダーシステム

私は、牢屋に閉じこめられていた。

「お願い、此処から出して！」

私は目の前の男・影山 瞬に言う。

影山は、

「カブトを抹殺するまで出せない。」

と、言った。

「貴方、生身の身体で慎吾に勝てると思ってるの!？」

私はそう言った。

一方、慎吾はと言うと・・・。

「それでは、君達はシャドウに入りたいと？」

と、面接担当者は言い、

「でもね、天道寺君は良いとしても、黒川田君は高校生でしょう。」

と、続ける。

「高校生じゃ駄目なんですか？」

俺は面接担当者に聞いた。

「そうとは言つて無いが、学校とかはどうするんだね？」

「それは手を打ってあります。」

「そうか・・・ならば試験を受けてみるかい？」

二人とも試験に合格したらシャドウに入隊させてあげよう。」

と、面接担当者は言う。

担当者が言う試験とは、新しいマスクドライダーシステムの資格者として選ばれる事だった。

担当者は、俺達を試験室に案内した。

試験室には、鉄で出来たコンテナの様な物が中央に置いてあった。

それ以外には何も無い・・・。

面接担当者は、カブトと同じタイプのベルトを天道に渡した。

「天道寺君、これから君には、ガタツクの資格者審査テストを受け

て貰う。

コンテナに入り賜え。」

すると、天道は言われた通りにコンテナに入って行った。それから暫くすると、コンテナの中で何かが起こっていた。何が起こっているのかは分からない。

そして、コンテナが開くと、中から血まみれになった天道が出て来た。

一体何があったのだろう。

面接担当者は、天道が腰に巻いていたベルトを外すと、それを俺に渡した。

俺は、そのベルトを腰に巻いた。

「これでどうしろと？」

「そのコンテナに入るんだよ。」

面接担当者はそう言うので、俺はコンテナに入った。

コンテナの中では、クワガタをモチーフにした青いゼクターがぷかぷか浮いていた。

これが俗に言う、ガタツクゼクターだ。

ゼクターは、俺の全身を確認すると、いきなり俺を攻撃して来た。そりゃそうだろう。クワガタとカブトはライバルなんだからな。つて、そんな事を考えている余裕は無かった。

ゼクターは、絶えず俺を攻撃して来る。

「殺される!？」

俺はそう思った。

無理を承知でゼクターを取捕まえるか？

そう思った俺は、突進して来るゼクターを取捕まえた。

ゼクターは、捕まされると暴れた。

が、俺は何とか落ちつかせる事に成功した。

すると、ゼクターは何故か俺に懐いてしまい、縋り付いたまま離れようとはしない。

まるで、そこらにいる熱いベタベタのカップルの様だった。(キモ

イ・・・。）

俺は困ってしまったが、取り敢えずコンテナを出す事にした。コンテナを出ると、いきなりクラッカーが鳴らされた。

「おめでとう御座います。貴方はガタツクの資格者として選ばれました。」

いやいやいや、選ばれたんではなくて、コイツが勝手に懐いたただけだ。

面接担当者は、

「合格です。シャドウの新リーダーとして頑張ってください。」

と、俺に言った。

「あの、血まみれの彼は？」

「不合格です。」

え、天道が不合格？

いや、あんた、試験に受かったら二人とも合格って言ったでしょ。

と、俺はツツコミを入れてやりたかった。

面接担当者は、

「それじゃあ、早速だけど、初仕事。お願いしますね。」

と、言った。

初仕事？

何をすれば良いんだ？

面接担当者の言う初仕事とは、ビートルワームを見張れと言う事だった。

こりゃ良い。これで真理を助けられる上に、ガタツクの資格を頂けて一石二鳥だ。

ビートルワーム救出

俺は、真理が閉じこめられていると言う牢屋に来ていた。

「誰だお前は？」

此処は関係者以外立ち入り禁止だぞ。」

と、一人の男が声を掛けた。

男の名は、影山 瞬。

シャドウの元リーダーだ。

「お前こそ誰だ。」

「影山 瞬・・・シャドウのリーダーだ。」

「待て、シャドウのリーダーはこの俺だ。」

「何を言ってるんだ？」

「たった今試験に合格し、本日付でシャドウのリーダーになった黒^く川^{くわ}田^だ 慎^{しん}吾^ご郎^{ろう}だ。」

俺がリーダーである以上、俺の命令に従って貰う。分かったらとつとと出て行け。」

俺がそう言つと、影山は顔を引きつらせた後、そそくさと牢屋を離れて行つた。

さて、真理を捜させて貰いましょう。

俺は、真理が閉じこめられている牢屋を一つ一つしらみつぶしに探した。

すると、意外と簡単に見つかった。

「し、慎吾！？来てくれたんだ。」

真理が言う。

「お前を放つて置く奴が何処にいる？」

「そうだよね・・・。お願い、此処から出して。」

「今出してやる。」

そう言つて、俺は牢屋を調べた。

それから暫くすると、影山が現れた。

「まだいたのか。」

いや、そんな事はどうでも良い。それより影山、コイツを牢屋から出してやれ。」

「それはいけません。カブトを釣る餌なので。」

影山はそう言う。

「そんな事してどうするつもりだ？」

「カブトを抹殺するんですよ。」

「ほお、そう言う事か。」

俺はそう言うのと、予め外しておいた檻の鉄格子をどかした。

「た、隊長!？」

「カブト抹殺は中止だ。」

真理は、俺がそう言った隙に逃げ出した。

影山は、

「逃がすか!」

と、ザビーゼクターを呼び、ザビーに変身をした。

と言う事だ?

ザビーは矢車の筈だ。

「待て影山。」

「何ですか隊長?逃げられちゃいますよ?」

「それで良いんだ。」

俺がそう言うのと、ザビーはキャストオフをし、クロックアップして追いかけて行った。

「何だアイツ。」

俺はそう言いながら、カブトゼクターを呼び、カブトに変身してキャストオフをすると、クロックアップで追いかけた。

真理は、ワームに姿を変え、追いかけてくるザビーから逃げ回っていた。

が、ザビーの動きの方が早く、直ぐに捕まってしまった。

「嫌っ、離して!」

真理はザビーに言う。

「こうでもしなきゃカブトは現れない。我慢しろ。」

と、ザビーが言ったので、

「成る程、俺狙いか。」

と、俺は言った。

「カブト!？」

ザビーは真理を抑えるのをやめると、俺の方へ向かって来た。

俺は向かって来たザビーにパンチをするが、ザビーはそれをかわして反撃する。

俺は、ザビーの攻撃を受け、怯んでしまった。

ザビーは、怯んでいる俺にラッシュを掛ける。

俺はラッシュを受け、身動きが取れなくなった。

それを見た真理は、

「本気でやって!」

と、俺に言う。

「貴様、手を抜いているのか!？」

ザビーはそう言って、ラッシュ攻撃をやめた。

「やらないのか?ならばこちらから行くぞ。」

そう言って、俺はザビーにラッシュを掛けた。

すると、今度はザビーが身動きを取れなくなった。

そして、俺は手加減をしてライダーキックをザビーに放った。

ライダーキックを受けたザビーは、ころころと転がって行き、ザビ

ーゼクターが外れ、変身が解けてしまった。

影山の惨めな姿が笑える。

俺はクロックアップが解除されると、真理を抱き抱えると、クロックアップでZECTを離れた。

おまけ

「カブトがビートルワームを救出した？」

加賀美 陸は、三島に聞いた。

「ええ。」

「ならば、ガタツクの資格者に・・・。」

「それが、大変な事になりました。その、ガタツクゼクターをカブトに奪われてしまいました。」

三島はそう申告する・・・。

コイツ、何を知っている？

「そうか・・・。」

加賀美 陸はそう言って黙り込んでしまった。

ビートルワーム救出（後書き）

ZECTがなんか凄い誤解を招いてますね。

ガタツク

ビストロ・ラ・サル。

此処に、俺と天道と加賀美が集まっていた。

「で、何だよ、話って？」

加賀美が俺に聞く。

俺は、加賀美にベルトを渡した。

「これは？」

「ベルトだ。」

「そんな事解ってる。」

何で俺にベルトを渡すんだ？」

「ガタツクの資格・・・お前に授けようと思ってな。」

「ガタツク？」

「ZECTが作った新しいマスクドライダーシステムだ。お前、廃病院に隠れてる子供、助けたいんだろ。」

と、俺は言う

廃病院・・・先日、ZECTがそこに数十匹のワームが棲みついていると言う情報を入手した場所だ。

加賀美は、一人でそこへ乗り込み、ワームに襲われ、その時に一人の子供に助けられたと言う。

「これがあれば数十匹のワームを一人でも殲滅出来るぞ。」

と、加賀美を唆す天道。そそのか

「俺が、ガタツク・・・。」

加賀美は、一人呟くと、ベルトを持ってサルを出て行ってしまった。俺は、その様子をじっと見ていた。

「黒川、心配か？」

「べ、別に心配なんかしてねえよ！」

それより天道、今月のツケの分、バイトで払っておけよ。」

俺はそう言っ、加賀美の後を追う様にサルが出る。

外に出ると、俺のカブトゼクターが飛んできた。

ゼクターは、空高く飛び上がり、

「加賀美を追え」

と、空中に描く。

俺はため息を吐くと、加賀美が目指したであろう、廃病院へ向かった。

一方、加賀美は例の廃病院に来ていた。

「加賀美君！やめなさい！」

と、一人の女性が病院内に入ろうとする加賀美を止める。

「岬さん、俺が行かないで誰が子供を助けるんですか？」

「ZECTは子供もワームと判断したわ。」

「嘘だ、嘘だあ！？」

加賀美はそう叫ぶと、止める岬を無視して一人で病院の中に入ってしまった。

そこへ、俺がやって来て、中に入ろうとしたが、

「待ちなさい。」

と、岬に止められてしまった。

「駄目よ入っちゃ。」

「何故です？」

俺はそう聞くが、岬は解答に困っていた。

答えられない岬に代わり、

「ワームがいるからか？」

と、俺が言った。

岬は固まった。

恐らく、こんな子供がワームの存在を知っているなんて、思っているのだろう。

俺はその間に、廃病院に入って行く。

中に入ると、壁や床などは殆ど朽ち果てていた。

流石、廃病院と言った所だ。

俺は、廃病院の中を歩き回った。

すると、一人の男が俺の前に姿を現した。

加賀美だった。

加賀美は俺に近付くと、

「付いてきたのか。」

と、言った。

「お前、無事なのか？」

俺は聞いた。

「何言ってるんだよ。無事じゃなかったらそこら辺で倒れてるよ。」

加賀美はそう言ったが、何か何時もと違う。

熱血感が漂っていないと言うか何というか・・・。

俺は、適当に誤魔化すと、加賀美と別れた。

が、加賀美はそつと俺をつけてきた。

それに気付いた俺は、わざと気付かない振りをし、そのまま行く。

それから暫く行くと、一人の男がベルトを持って倒れていた。

それは、加賀美だった。

待て、じゃあ後にいる加賀美は誰だ？

俺は取り敢えず、倒れている方の加賀美に気を配り、近付いた。

加賀美の胸には、一つの細い穴が開いていた。

「加賀美、しっかりしろ！」

だが、加賀美は目を開けなかった。

ワームにやられたのだろうか？

俺は、ずつとさつきから追って来ている加賀美を気にした。

まさか、アイツは・・・。

と、疑いながらも、目の前の加賀美が持っていたベルトを、加賀美

の腰に巻き付けた。

すると、一瞬にして加賀美の傷が塞がり、加賀美は目を覚ました。

「黒川・・・。」

加賀美はそう言った。

「加賀美、何があった？」

俺は加賀美に聞く。

加賀美は、

「ワームに、襲われた……。」

と、言った。

「黒川、騙されるな！」

俺をつけてきた加賀美は、姿を見せるとそう言った。

「コイツがワームだと言いたいのか？」

俺は隣にいる加賀美を指差して言った。

「そうだ。そいつはワームだ。」

それを聞いた俺は、笑ってしまった。

「何が可笑しい？」

「ああ、自ら墓穴を掘るとはな、と……。」

「墓穴？」

「無事じゃなかったらそこら辺で倒れているよ。この言葉で気付いた。」

お前がワームだって事にな。」

「俺がワーム？何処にそんな証拠が？」

そう言っつて、俺をつけてきた加賀美はゲラゲラ笑った。

それに対して俺は、

「親父が言っていた。」

本物を知るものは、偽物には騙されない。」

と、言った。

すると、俺をつけてきた加賀美は、成虫ワームに姿を変えた。

「加賀美、お前の力・・・見せてやれ。」

そう言っつて、俺はガタックゼクターを呼び、それを加賀美に渡した。

加賀美は、ゼクターを受け取ると、ベルトに装着してガタックに変身した。

変身が終了すると、ガタックは肩のガタックバルカンをワームに向けて連射した。

加賀美に擬態していたワームは、ガタックの攻撃を受け、やがて爆発して消滅した。

「すつげえな・・・。」

俺は思わず呟いた。

そしてガタツクは、そのまま何処かへ行ってしまった。

その後、ワームが爆発する時と同じ爆発音が何回か聞こえた。

きつと、ガタツクがワームと戦っているのだろう。

俺は、戦う必要が無いと思ったので、廃病院の入り口の方へ向かった。

入り口まで来ると、ライダーフォームのガタツクが苦戦してるのが見えた。

「手際が悪い。」

そう呟いた俺は、カブトゼクターを呼んでカブトに変身し、カブトクナイガンで成虫ワームを離れた所から攻撃。

放たれた一発の弾丸は、成虫ワームに直撃し、その場で怯ませた。

怯んだワームがこちらに気付くと、クロックアップをして向かって来た。

が、俺は瞬時にキャストオフをしてアマスクドーマーを弾き飛ばし、ライダーフォームになる。

すると、成虫ワームの動きを弾け飛んだアーマーが止めた。

アーマーの当たったワームは、地面に叩き付けられた。

そして、起きあがると再度クロックアップで襲って来たので、俺もクロックアップした。

クロックアップをした俺は、ワームに攻撃をするが、ワームも負けじと反撃をしてくる。

俺はいったん退くと、再度ワームに近付き、ラッシュを喰らわせる。ラッシュ攻撃を受けたワームは、身動きが取れなくなる。

俺は隙を見つけると、ワームにライダーキックを叩き込んだ。

その瞬間、ワームは爆発をして消滅した。

それと同時に、

「clock over」

と言う機械音が発せられ、クロックアップが解除された。

俺は変身を解き、

「まだまだだね。」

と、ガタツクに言い残して廃病院を後にして帰路に着いた。

ガタツク（後書き）

やっぱりガタツクは・・・加賀美、お前しかいない！
つか、いい加減ドレイクやサソードとか出さないとなあ。
所で、矢車 想はどうなったんでしょ???

雪男

寒い真冬の時期。

俺は此处、福島県あたらず高原少年自然の家に、冬休みを利用してスキー旅行に来ていた。

勿論、俺だけでは無く、日下部 ひより、天道 総司、霧島 真理。このメンバーで来ていた。

理由は、真理が俺をスキーに誘い、俺がひよりにスキーに行くと云ったら、僕も行くつて事になって、天道が、

「ひよりが行くなら俺も行く。」

と、言い出した為に、このメンバーで来る事になったのだ。

因みに、俺と天道の部屋が同じ……。ああ嫌だ。

「お前、何だか暗いぞ。」

天道が俺に言う。

俺は、

「そうかあ？」

と、言い返した。

すると、天道はそれつきり口を開かなくなった。

コイツといると、何か疲れる……。

コンコン！

誰かが扉を叩いた。

「どうぞ。」

と、俺が言うと、真理が部屋に入つて来た。

「どうした？」

俺は真理に聞く。

真理は、

「雪男つて何？」

と、突然聞いて来た。

「お前、それ本気で言ってる？」

「本気よ。だって私、地球の事良く知らないし。」

そうだったあ、真理は地球外から来たワームだったんだあ！

俺は真理に雪男の事を説明した。

雪男とは、降雪の多い地方にいて言われている獣人。ヒマラヤ山脈のイエティ、ロッキーマウンテンのビッグフットなどを指すことが多い。日本国内では中国山地のヒバゴンも雪男とされている。

それぞれの雪男の共通点として、人里離れた山奥に住む、全身毛むくじやら、直立二足方向するという特徴が挙げられる。体色については、白、茶色、灰色など諸説あり、共通認識とはなっていない。目撃証言はあるが、ヒグマやハイイログマ（グリズリー）の見間違えも数多く含まれているとされている。それ以外の正体としては、毛皮を着た猟師や猿人の生き残り、未発見の生物などが挙げられている。

それが、7年前から急に人里へ降りて来たりしては、人々に悪さをしていると言う噂があるのだ。

この現象、7年前に飛来した隕石と何らかの関係があるのだろうか？

「ねえ、それって・・・この地方にも出るの？」

真理が恐る恐るそう聞くと、

「出る。」

と、天道が言った。

「そんな莫迦な。」

と、俺は笑って言うてやったが、この間のニュースを思い出してしまった。

それは、あだたら高原で雪男を間近で見たと言うニュースだった。

目撃者は多数おり、その内の一人が怪我をして病院に運ばれたと言う事だった。

「こ、怖い・・・。」

そう言うて、真理は震えていた。

「黒川、怖がつてるぞ。」

「お前のせいだ天道。」

と、俺は言った。

「何だ黒川。人のせいにするのか？」

「いやいやいや、してませんよ。」

取り敢えずお前は、

「もういい、死ね。」

と・・・。

俺がそう言つと、天道は凹んでしまった。

俺は直ぐに、

「あ、いや、その・・・何だ、冗談って奴だ。」

と言つたが、天道の凹み方は尋常では無く、立ち直る事は無かつた。もう良い、放つて置こう。

そう思つた時、となりの部屋からひよりの悲鳴が聞こえた。

「今の、ひよりの声じゃないか？」

と、天道が言う。

立ち直るの早！？

俺達は、となりの部屋に行き、ひよりの様子を伺いに行つた。

「開けるぞ。」

と、天道はそう言つて、部屋の扉を開けた。

するとそこには、真っ白で全身毛むくじやらの怪物の様なモノが立っていた。

「雪男？」

俺はそう呟いた。

ボクっ娘のひよりは、

「ボケつとしてないでさっさとボクを助ける。」

と、偉そうな事を言う。

変な生き物は俺達に気付くと、ひよりを抱き抱えたまま目にも留まらぬ速さで窓ガラスを破つて逃げて行つた。

が、生身の俺と天道にしてみれば、奴は目にも留まらぬ速さで逃げたのでは無く、ひよりを抱き抱えたまま一瞬にして消え去つた様に見えた。

「何が起こった？」

俺が言っと、

「逃げたのよ。」

と、真理が言った。

天道は真理の言葉に対し、

「何故解る？」

と、質問を投げつけた。

やばい、正体がバレる。

そう思った俺は、

「いや、何つつか、コイツ、動体視力がめっちゃめっちゃ高えんだ。」

と、適当に誤魔化したか、天道には通用しなかった。

天道は真理に、

「お前、ワームだな。」

と、言った。

バレた！？

と思っただが、

「え、ワームって何です？」

と、真理が爆弾発言。

流石だ！

すると天道は真理に、

「人の姿で奴の動きを捕らえられるのは人間に擬態したワームしかない……。」

と、言った。

真理は、

「デヘヘ、バレちゃった。」

と、笑いながら俺に言う。

「やはりそうか。」

天道はそう言っと、ヘラクレスゼクターを呼び、その場でヘラクレスに変身し、

「正体を見せる。俺が倒す。」

と、真理に向かって言った。

コイツ、見た目はクールだが相当の熱血野郎か？

「落ち着け天道。」

親父が言っていた。

男はクールであるべき、沸騰するお湯は蒸発するだけだ。」

俺はそう言つて、天道を落ちつかせようとしたが、

「全てのワームは俺が倒す。」

と言つて聞かない。

すると真理は、

「私はワームだけど、他のワームみたいに悪いワームじゃないの。」
と、言う。

俺は、

「その通りだ。」

と、天道に言つたが、

「お前はコイツに騙されてるだけだ。」
と言う。

「待て天道、コイツは今まで人を襲った事は一度も無い。
寧ろ襲われてる人々を守っている。それをどう説明する？」

俺がそう言つと天道は、

「お婆ちゃんが言っていた。」

悪魔の囁きは時として天使の声に聞こえる。

コイツはお前の知らない所で人を襲っているかもしれない。」
と、言つた。

「そんなの嘘だ。」

「前に見たことがある。カブトムシの様なワームがコイツを殺して
擬態した所を。」

カブトムシの様なワーム・・・真理ことビートルワームの事か？

俺は天道に、

「それは何時だ？」
と聞く。

「8月上旬だ。あの日、コイツと若い女性が二人で歩いていた。そこへ一匹のワームが現れ、コイツを殺した。」

それを見ていた女性は悲鳴をあげて逃げに行った。」

「マジかよ?」

俺が聞くと、

「マジよ。」

と、真理が言う。

「真理、人を守る良いワームって言ったのは嘘だったのか?」
俺がそう聞くと、真理は頷き、ビートルワームに姿を変えた。

雪男（後書き）

ビートルワームに姿を変えた真理・・・。

真理の目的とは一体・・・。

にしても、全身が白い毛で覆われている化け物は何なんだ？

カブトVSヘラクレス

ビートルワームに姿を変えた真理は、ヘラクレスに攻撃をする。だが、ヘラクレスは全くダメージを受けていない。

ビートルワームは、クロックアップをする。

「キャストオフ。」

天道ヘラクレスは、キャストオフをすると、

「clock up」

と、機械音を発して、クロックアップで応戦する。

その瞬間、二人の姿が消えた。

俺は、カブトゼクターを呼ぶと、カブトに変身。

すると、ビートルワームとヘラクレスが戦っているのが見えた。

俺はキャストオフをすると、クロックアップをした。

クロックアップ中の俺は、ヘラクレスの攻撃からビートルワームを守った。

何故だか解らない。でも、そうしたかったんだ。

「慎吾・・・どうして？」

と、ビートルワームは聞く。

「お前が死んだら、真理の記憶が消えるだろ？」

俺はそう言いながら、天道ヘラクレスに攻撃をする。

「黒川、ワームの味方をする気か。」

天道はそう言って反撃をする。

攻撃を受けた俺が窓から外に出ると、天道も同様に窓から出てくる。

「天道・・・俺は真理を守る。例えそれがワームであっても・・・。」

「

俺は、全てのワームを倒す。」

天道はそう言って俺を攻撃する。

俺は攻撃を受けたが、直ぐに反撃をした。

こうして、カブトVSヘラクレスの壮絶なバトルが始まった。

俺は、天道ヘラクレスにラッシュ攻撃をする。

ラッシュ攻撃を受けた天道ヘラクレスは、身動きが取れない。

「どうした天道。それでも選ばれし者か？」

そう言つて、俺は天道ヘラクレスを思いきり蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた天道ヘラクレスは、雪の上をころろと転がって行き、少し行つた所で止まると立ち上がって、俺に反撃をして来た。

俺は、天道の攻撃を受けて怯んだ。

天道ヘラクレスは、その隙にラッシュをして来る。

ラッシュを受けた俺は、身動きが取れなくなった。

身動きの取れない俺は、攻撃を受けながら後へ退く。

その後、天道ヘラクレスは思いきり蹴飛ばした。

蹴飛ばされた俺は、雪の上を転がって行き、何とか途中で起きあがると、天道ヘラクレスに近づき、カブトクナイガンで天道ヘラクレスを攻撃。

しかし、天道ヘラクレスは巧い具合に避け、俺の後に回る。

そして、俺を空高く放り投げると、ライダーヘッドクラッシュを発動させ、空中に飛び上がって俺を攻撃する。

俺はダメージを受けると、そのまま落下して行き、雪の上に「ドスッ」と、落ちた。

そして天道ヘラクレスが雪の上に着地すると、両者のクロックアップが自動的に解除された。

俺は立ち上がり、ライダーキックを発動させ、天道ヘラクレスに回し蹴りを放った。

ライダーキックをまともに喰らった天道ヘラクレスは、数メートル吹っ飛んで雪の上に落ちると、ヘラクレスゼクターがベルトから外れて変身が解けた。

変身が解けた天道は、起きあがって生身のまま俺に向かって来る。

俺は変身を解き、天道の攻撃を受け止めると直ぐに反撃をした。

天道は攻撃を受けると、

「ぐっ！」

と、言うが、怯む事無く俺をぶん殴る。

天道の攻撃は俺の頬に当たり、俺は頬に痣を作った。

「なかなかやるな。」

俺が天道にそう言つと、

「お前もな。」

と、天道が言つた。

俺は、天道の腹を思い切りぶん殴った。

すると、天道は口から血を吐き、その場に倒れる。

天道は起きあがると、殴りかかって来たが、俺はそれを片手で受け止めた。

受け止めた俺は、

「お前は凄えよ。今度はもつと良いバトルをしような。」

そう言つて、天道を背負い投げた。

放り投げられた天道は、背中を雪の地面に強く叩き付けられた。

その瞬間、天道の口から再度血が吹き出る。

血が吹き出た天道は、白目を剥いて気絶をしてしまった。

俺は天道を抱え、旅館へと戻り、部屋へと向かった。

部屋に入ると、真理が待っていた。

「し、慎吾!？」

「真理・・・天道を頼む。」

そう言つて天道を真理に任せると、俺はもう一仕事をしようと、旅館の従業員などに聞いて回り、雪男の住処すみかを突き止めた。

そして俺は、その雪男の住処に向かった。

ひよりの救助

俺は、雪山の奥深くにある洞窟へ来ていた。

その洞窟は、今では雪男の住処となっている・・・。

つまり、昔は人が使っていたと言う事だ。

俺は、その洞窟に足を踏み入れた。

すると、一人の女性が、

「助けに来てくれたのか？」

と、言った。

俺はそれがひよりだと解った。

「ひより、無事だったのか？」

「ああ。それより、中に数人の子供達が捕まっている。」

「雪男は？」

「今はいない。」

そう言うのと、ひよりは洞窟の奥まで俺を連れて行った。

奥まで行くと、そこは広場になっており、ひよりの言った通り数人

の子供達がいた。

また、数人の子供達の中にひよりの姿を発見した。

とすると、後にいるひよりは誰？

そう思った俺は、後を振り向いた。

振り向くと、そこには間違い無くひよりが立っていた。

「どうした？」

ひよりは聞く。

「あそこにいるひよりは誰だ？」

俺がひよりに聞くと、

「気付いたか。」

と言って、雪男に姿を変えた。

「ワームか？」

俺は雪男に聞いた。

雪男は、

「だったらどうする?」

と、答えた。

「お前を倒す。」

俺はそう言っただけだが、

「生身の身体で勝てると思ってるのか?」

と、ワームが言った。

すると、ひより以外の子供達が立ち上がり、サナギワームに姿を変えた。

「お前ら、全員ワームか!」

俺はそう言った。

サナギワーム達は俺を囲み、俺に飛びついて来た。

俺は、サナギワーム達にタコ殴りされ、気が付くと、ひよりと背中合わせに縛られていた。

「やっと気が付いたか。」

と、雪男ワームは言い、

「お前達はそこで仲良く飢え死にしろ。」

と言うと、そいつは俺に擬態した。

「てめえの目的は何だ!」

俺はもう一人の俺に聞くと、

「世界征服さ。この世界の人間共を全て殺し、世界を乗っ取る。」

と、もう一人の俺は答えた。

「ぶっ殺す!」

俺はそう言っただけで、カブトゼクターを呼ぼうとしたが、腰にベルトが付いていない事に気が付く。

あれが無くてはゼクターを呼べない。

「お前が探しているのはこのベルトだろ?」

もう一人の俺はそう言っただけで、ベルトを俺に見せびらかした。

「返せ!」

俺がもう一人の俺にそう言っただけで、

「何を言っている？これは元々は我々ワームのものだ。」

と、言い返して来た。

「ワームのもの？」

「その通り。これはワーム地球征服部隊がZECTの力を借りてワームの為に開発したベルトだ。」

ZECTの力！？

「ZECTは、ワームの地球制服に力を貸していると言うのか！？」
俺がそう聞くと、もう一人の俺は、ZECTがワームに荷担している事、ワームの為にベルトを作っている事などを詳細に話した。

「と言う訳だ。このベルトは返して貰う。」

そう言っ、もう一人の俺はベルトを持って何処かへ行ってしまった。

それから暫くすると、ビートルワームがやって来た。

「真理、縄を解いてくれ！」
ほど

俺はビートルワームに言った。

ビートルワームは、黙って俺達の縄を解いた。

縄が解けると、

「助かった。」

と、ビートルワームに言った。

ビートルワームは、真理に戻ると、

「何で捕まってるの！？」

と、怒りながら聞いて来た。

「はめられたんだ。」

「え？」

「ひより以外に数子供達がいたんだけど、そいつら全員ワームでさ。俺、そいつらにタコ殴りにされた上に、ベルトを盗まれた。」

俺は真理にそう言ったが、

「馬鹿！何やってるのよ！？」

と言っ、真理は俺をビンタした。

「すまない……。」

と、俺は謝った。

「まあ良いわ。」

真理はそう言うのと、ビートルワームに姿を変え、俺とひより抱えた。「一瞬だからね。」

そう言うのと、ビートルワームはクロックアップをして旅館の部屋まで戻ってきた。

が、当然俺には、瞬間移動をした様にしか見えなかった。

部屋に着くと、ビートルワームは真理に戻り、抱えていた俺達を離れた。

俺はひよりを抱えると、布団の上に寝かせてあげた。

そして俺は、真理にZECTの事を聞いた。

「その話、誰に聞いたの？」

真理はそう言う。

俺は、雪男ワームに聞いたと言う事を話した。

「そう。何もかも知っちゃったんだ。」

真理はそう言うのと、7年前に結成されたZECTが最近になって内部で二つに分かれたと言う事を話した。

ひよりの救助（後書き）

もしかして、カブトTHE MOVIEの設定と被ってる？

ネオスゼクト

7年前・・・人類は存亡の危機に追われ、ワームに対抗すべく、秘密機関「ZECT」を結成。

だが、最近になってZECTは内部で二つの組織に分かれた。

片方は、マスクドライダーシステムを使い、ワームと共に世界征服を企み、もう片方は、ワームを一匹残らず消して行くと言うもの。

その内の前者が、Neos ネオスゼクト ZECTと言う。

「ネオスゼクト・・・それがワームにマスクドライダーシステムを制作した秘密機関よ。」

と、真理は言う。

「成る程、大体解った。だが、何でお前だけは征服を嫌うんだ？」

お前は、元々は他の仲間と一緒に地球征服に手を掛けていたんだろ？」

「真理ちゃんに擬態してから心境が変わったからよ。」

「どういう事？」

「真理ちゃんね、戦争とかそう言うのを嫌っているの。その感情が、擬態した時に流れ込んで来たのね。」

真理はそう言った。

「成る程。だから京知釜海岸に行った時、俺をワームから守ったのか・・・。」

「うん。でも、理由はそれだけじゃないけどね。」

「それだけじゃないって？」

俺が聞くと、真理は顔を赤くして、

「真理ちゃん、貴方の事が好きだったから。だから私は貴方をワームから守ったのよ。」

それを聞いた瞬間、俺の心臓の鼓動が早くなった。

「真理、実は俺も・・・お前が好きなんだ。」

俺は真理に衝撃の告白をしたが、

「そんな事よりベルト、取り返しに行きましょう。」
と、話を逸らされてしまった。何故？

真理は腰のベルトを外すと、俺にそれを渡した。

「これでカブトになりなさい。」

真理はそう言った。

ちよと待て。ベルトって相関性があるのか？

俺は真理に聞くと、

「あるわ。」

と、言った。

俺はベルトを受け取ると腰に装着し、カブトゼクターを呼び、カブトに変身をする。

俺が変身し終わると、

「さっきの洞窟、行きましょう。きっと、戻って来てるかもしれないよ。」

と、真理は言った。

俺は真理と一緒に、先ほどの洞窟へ行く事にした。

一方、洞窟には様子を見にもう一人の俺が戻って来ていた。

「あの餓鬼、何処へ行った!？」

もう一人の俺はそう言う。

「あの状態ではそう遠くには行っていない筈だ。お前達、あの餓鬼共を捜せ。」

もう一人の俺は、サナギワームにそう言った。

命令されたサナギワームは、俺達を捜しに洞窟を出ようとしたが、

俺の攻撃を受けて中へ押し戻されてしまった。

「何があった!？」

と、もう一人の俺が洞窟から出て来た。

「また会ったな、雪男さんよ。」

俺がもう一人の俺にそう言うのと、

「貴様、どうやって!？」

と、驚きながら言った。

「どうやって？コイツに助けて貰ったのさ！」

俺がそう言っていると、ビートルワームが空から降りてきた。

「お前は、ビートルワーム！？

お前が何故、人間を！？」

それに、何故人間がマスクドライダーシステムを装備出来るんだ！？」

もう一人の俺は次々に質問を投げつけた。

「何が言いたい？」

俺はもう一人の俺に聞く。

もう一人の俺は、

「マスクドライダーシステムは、ワームにしか装備出来ない筈！

仮に装備出来たとしても、変身が解けたら死んでしまう。」

と、言った。

ワームにしか装備出来ない上に変身が解けたら死ぬ？

と言う事は、俺もワームなのか？

俺は自分を疑った。

何故なら、俺は資格者になる前、ワームに襲われた事がある。

そこで本来の俺は死に、ワームである俺がそれに擬態した。

考えられない事では無かった。

そうでなければ、俺がマスクドライダーシステムを装備出来る筈が無い。

俺がそんな事を考えていると、もう一人の男が雪男ワームに姿を変え、いきなり攻撃をして来た。

気が付くと、俺は攻撃を受けていた。

「人間の癖に良い気になりやがって。」

雪男ワームがそう言っていると、クロックアップをし、俺を攻撃して来た。

俺は、瞬時にキャストオフをし、アーマーを弾き飛ばした。

アーマーが弾け飛ぶと、雪男ワームに当たって動きを止めた。

俺は、クロックアップをすると、雪男ワームに攻撃をしたが、雪男

ワームには全く効いていなかった。

俺は雪男ワームの攻撃を受けてしまい、クロックアップが解除され、変身が強制的に解除されてしまった。

どうなるんだ俺？本当にコイツに勝てるのか？

ネオスゼクト（後書き）

ぐはっ！？

こつなる予定では無かったのに！

俺は人間だ！

俺は雪男ワームとの戦いに敗れ、変身が解けてしまった。
大丈夫か俺？本当にコイツに勝てるのか？

「ふん、たわいも無い。」

雪男ワームは、惨めな俺の姿を見ると、そう言った。

「慎吾！？」

ビートルワームはそう言っ、俺の元へ駆けつける。

「慎吾、しっかりして！」

ビートルワームは、気絶してる俺に声を掛ける。

「さて、次はお前の番だ。」

そう言っ、雪男ワームは俺に擬態すると、ベルトを腰に付けてカブトゼクターを呼んだ。

そして、それをベルトに装着してカブトに変身をした。

「キャストオフ。」

カブトは、キャストオフをすると、クロックアップをし、ビートルワームに攻撃をする。

が、勿論人間である俺にはその様子など見えない。

それから暫くすると、俺の身体に変化が起きた。

俺の身体は、雄のカブトムシをモチーフにした成虫ワームに、ゆっくりと姿を変える。

俺っ、ワームだったのか・・・。

目が覚めると、俺の身体は完全にワームになっていた。

俺は自分の姿を確認する・・・。

「そんな、馬鹿な・・・。」

俺は思わずそう言った。

俺が途方に暮れて佇んでいると、

「お目覚め？」

と、ビートルワームがやって来て言った。

それに続いてカブトがやって来て、

「これはこれは、ワーム界の王・キングビートル様ではありませんか。」

と、俺に向かって言う。

キングビートル？

何言ってるんだコイツ？訳解んねえ。

「言ってる意味が解らないぞ。」

俺はカブトにそう言った。

するとカブトは、

「王様、何を寝ぼけていらっしやるんですか？貴方は惑星ワームを治める誇り高きワームの戦士ではありませんか。」

思い出して下さいよ。」

そんな事言われても、俺には何が何だかさっぱり・・・。

その時、ある光景が俺の脳裏を過ぎる。

俺の脳裏を過ぎった光景は、今は無き星の姿だった。

7年前、太陽に吸い込まれ、跡形もなく消滅したと言う・・・。

何だ今のは！？

俺は更に思い出そうとした。

すると、ある光景の鮮明なイメージが浮かんだ。

その光景は、自分が地球では無い星にいる所から始まる。

俺はそこで、昆虫をモチーフにした怪物共を宇宙船に誘導していた。

俺は、全員乗り込んだのを確認すると、

「よし、全員乗り込んだな。」

と言って、操縦士にOKサインを送った。

操縦士は、

「了解！」

と言って、座標を地球にセットし、地球に向けて宇宙船を発射させた。

発射した宇宙船は、宇宙に飛び出すと、クロックアップをして地球

まで飛んでいく。

その後、地球では無い星は太陽に吸い込まれ消滅、それと同時に宇宙船は地球の渋谷と言う所に墜落し、周辺を崩壊させた。
ある光景はそこで終わった。

その時、俺は全てを思い出した。

俺がワームで、地球外の星から宇宙船に乗って来た事、人間を殺して擬態した事の全てをだ。

それから、他の仲間が地球征服を企て、俺はそれに反対し、仲間の元を離れたんだ。

そして、ある日突然、ある男にベルトを託された。それが全ての始まりだったか？

「俺、思い出したよ。」

昔、俺は惑星ワームを治めていた……。」

俺はカブトにそう言った。

「やっと思い出してくれましたか。」
と、カブト。

「そんで、星が壊滅の危機に迫られたんで、皆を宇宙船に誘導させ、惑星ワームと大気が似ている地球に移住する事にした。

そして、宇宙船は星を離れ、やがて地球に墜落し、周辺を壊滅状態に陥れた……。」

その後、俺は地球人・黒川 慎吾を殺して擬態したんだ。

それから俺は、地球人として生きて行く事にしたが、他の連中は地球を征服すると考えた。

俺はそれに反対し、一人仲間の元を離れたんだ。

それから4年、俺はある男にベルトを託された。
それが全ての始まりだったんだ。」

俺は一人思い出話を語った。

「裏切り者……。」

カブトはそう言って、俺を攻撃。

俺は攻撃を受けると怯む。

カブトは怯んだ俺に蹴りを入れる。

蹴られた俺は、数メートル飛ばされた。

カブトはその隙に、

「ライダーキック。」

と言って、ライダーキックを発動し、回し蹴りをして来た。

俺はライダーキックをまともに受けると、大ダメージを受けた。

「くっ！」

俺は起き上がろうと必死。

カブトは、

「しぶとい奴目。」

と、言う。

「負けられねえ。お前みたいな奴には、死んでも負けられねえ！」

俺はそう言った。

「裏切り者が何を言う？」

と、カブト。

「裏切り者？確かに俺は裏切り者だ。

だが、それ以前に俺は人間なんだあ！」

そう言って、カブトのベルトを破壊。

ベルトを破壊されたカブトは、変身が解け、もう一人の俺に戻る。

変身が解けたもう一人の俺は、雪男ワームに姿を変え、

「まだそんな力を！」

と、言った。

「言った筈だ。お前には、負けられないと！」

俺がそう言うと、

「おのれっ！」

と、俺に殴り掛かって来る。

が、俺はソイツの攻撃を止め、そのまま空中へ放り投げた。

雪男ワームは、空高く飛ぶと、今度はそのまま落ちて行く。

俺は、ジャンプすると、頭の角でソイツの体を貫いた。

「貴様！？」

と、雪男ワーム言いながら、雪男ワームは空中で爆発して消滅。俺は空から降り、雪の上に着地した。

雪男ワームを倒すと、俺は人間の姿に戻った。

「終わった、のか？」

俺はそう言った。

「ええ、貴方は雪男ワームに勝ったのよ。」
と、ビートルワーム。

「勝った。雪男に勝ったぞー！」

俺は嬉しさのあまりにそう叫んだ。
すると俺は、

「やべ。立ってんの、限界だ俺。」

と、倒れて気絶した。

次に俺が目覚めると、旅館の部屋にいた。

「目が覚めたのね。」

と、真理。

「すまない……。」

俺は真理に謝った。

「ううん、謝る必要なんて無いわ。」

真理はそう言った。

「ありがとう……。」

俺はそう呟く……。

そして俺は誓った。

ネオスゼクトは俺が潰す！

と……。

俺は人間だ！（後書き）

ネオスゼクト、それは一体！？
そして、奴らの目的とは？

新たなライダー

ZECT総本部・・・。

「ついにこの時が来たか・・・。」

と、加賀美 陸は言う。

「ええ、来ましたね。」

と、三島。

「君、ドレイクの資格者、頼むよ。」

「はい！」

三島は返事をする、加賀美 陸と別れた。

あれから数週間、とうとう短い冬休みが終わった。

俺は今、人間として普通に学校へ通ってる。

そして俺は今、体育館で体育の授業を受けている。

「黒川、何ボケっとしてんだ!？」

と、体育教師。

「あ、すみません。少し考え事を。」

と、俺は言う。

「しつかりしろよ。最近たるんでるぞ。」

それは仕方が無い。

今まで俺は人間だと思っていたんだから・・・。

「おい、黒川! 聞いているのか!？」

体育教師が言う。

「あ、すみません。」

「困るんだよ。それじゃあ。」

それで、やるのか、やらないのか？」

「何をですか？」

俺が聞くと、皆が笑う。

「はあ・・・お前なあ、人の話はちゃんと聞いてたか？」

柔道の背負い投げ、皆にお手本を見せてくれる約束だったろ。」

そうだった。俺は皆に手本を見せる約束していたんだ。

「あ、そんじゃあ、良く見てて。」

俺はクラスの男子生徒に言うと、教師を実験台に背負い投げをした。

「今のが背負い投げだ。」

そう言つと、生徒は拍手をする。

体育教師は起きあがると、

「もつと優しく出来ないのか!？」

と、言う。

そんなに強かったか俺？

「そいじゃ、皆にもやって貰おう。」

と、体育教師が言つた。

生徒は立ち上がり、ペアを組むと、背負い投げの練習をした。

そんな矢先、突如天井に大きな穴が開き、瓦礫^{がれき}が頭上から降つてきた。

そして、一匹の成虫ワームが降りて来た。

体育教師は手際よく生徒を一カ所にまとめ、

「あんた、何なんだ!？」

と、成虫ワームに言う。

成虫ワームは、体育教師に擬態をし、

「生身で俺と戦おうつてのか？」

と、体育教師に言つた。

体育教師は、

「俺は空手10段、合気道6段、柔道初段。お前なんかこてんぱんにしてやる!」

と言つて、ワームに攻撃をする。

しかし、ワームは擬態を解いて教師の攻撃を止めた。

「糞!」

体育教師は言う・・・。

「先生、ワーム相手に生身の身体じゃ無理だ!」

俺は体育教師を止めたが、体育教師は俺の言葉を無視してワームに
もう一度攻撃をする。

が、またもやワームに止められてしまった。

「弱い、弱すぎる。」

ワームはそう言うのと、肩からツルの様なムチを出し、体育教師の身
体を貫こうとした。

俺は、カブトゼクターを呼んで、その攻撃を遮った。

そして俺はカブトゼクターを掴み、

「変身。」

と言って、ベルトに装着してカブト・マスクドフォームに変身した。

「お前ら逃げろ。」

俺は生徒に向かってそう言ったが、生徒は首を横に振った。

「だったら見てな。」

俺はそう言って、カブトクナイガンを取りだしてワームに一発の銃
弾を撃ち込む。

銃弾が当たると、ワームは教師を放し、俺の方を向き、俺を攻撃し
て来た。

ワームは俺にラッシュを掛け、俺はワームのラッシュを受ける。

「黒川、やり返せ！？」

と、体育教師は俺に言う。

勿論そのつもりだ。
が、

「これは先生の戦いです。生徒を守りたいが為、勇気を持ってワ
ームに立ち向かった。

そんな勇士ある先生の思いに俺は答えます。

コイツを潰しますか？」

と、俺は体育教師に言った。

体育教師は、

「頼む！」

と、言った。

俺は教師の思いに答え、成虫ワームを押し返し、

「キャストオフ。」

と、言つてキャストオフをし、ライダーフォームへと姿を変えた。するとワームは、クロックアップをした。

「クロックアップ。」

そう言つて俺は、クロックアップをし、ワームに攻撃。攻撃を受けたワームは、足がよろけ、転んでしまった。ワームは起きあがると、俺に向かって来る。

俺は、

「ワン、ツー、スリー」

と、ゼクターの三つのボタン（フルスロットル）を順番に押すと、ゼクターホーンをマスクドフォームの状態へ倒し、

「ライダーキック。」

と、言い、もう一度ゼクターホーンを反対側へ倒した。

すると、右足が燃えがり、

「ルアイダーキック」

の機械音と共に俺は、接近してきたワームに回し蹴りを放とうとした矢先、

「ライダーシューティング」

の機械音と共に、成虫ワームが勝手に爆発を起こした。

いや、そうでは無い。何者かがワームを消したんだ。

「clock over」

俺はクロックアップを解除すると、ワームに当たった球が飛んできた方向を見た。

するとそこには、トンボをモチーフにしたマスクドライダードレイクが銃を構えて立っていた。

「ドレイクか。」

俺がそう言つと、ドレイクはその銃で遠距離攻撃をして来た。

「クロックアップ。」

俺はそう言い、クロックアップモードに入ると、飛んできた球を避

け、ドレイクに近付いた。

「ネオスゼクトか？」

俺はドレイクに聞いた。

が、ドレイクは問答無用で俺を攻撃。

攻撃を受けた俺は怯み、その隙にドレイクは俺に銃を連射。

そして俺も、カブトクナイガンでドレイクに連射する。

すると、俺の撃った弾の一発が、ドレイクのゼクターに当たった。

球が当たったゼクターは自動的にドレイクグリップから外れ、

「clock over」

の機械音と共にドレイクの変身が解けた。

俺はクロックアップを解除すると、変身を解き、ドレイクの資格者に、

「何者だ？」

と、聞いた。

資格者は、「風間 かざま 大介 だいすけ」と、名乗った。

風間は軽く自己紹介をした後、何処かへ行ってしまった。

何だ、アイツ・・・。

新たなライダー（後書き）

風間 大介って、こんな人だったけ？

サソード（前書き）

取り敢えずサソード出しちゃいます。

サソード

7年前・・・。

俺は一人の地球人・黒川 慎吾を殺害し、擬態。

それ以来、俺の心境は一変し、人間として生きる事を誓う。

それから4年、一人の男が俺の前に現れた。

「このベルトをやる。」

そう言つて、男は俺にベルトを渡し、

「世界を救え。」

と、言つた。

「あんた、誰？」

「天道 総司。天の道を往き、総てを司る男だ。」

天道はそう言い残すと、何処かへ行つてしまった。

ジリリリリリリリリリリ

朝の目覚ましが鳴る。

俺は、目を覚まし、それを止めると、トイレを済ませ、洗面所に行つて顔を洗う。

顔を洗い終わると、食卓に向かつて食事をする。

それから30分、食事を済ませた俺は、学校へと登校する。

俺は登校中にあるコンビニによると、ペットボトルに入ったジュース・アク。リアスを買ひ、学校に向かつて歩き出す。

それから暫くすると、サソリをモチーフにした一匹の成虫ワームが現れた。

レジストコード、スコルピオワーム。

俺はセクターを呼んでカブトに変身すると、キャストオフをした。

「cast off・・・change beetle」

と言つ機械音が鳴り響く。

俺の存在に気付いたスコルピオワームは、俺に襲い掛かつて来た。

が、俺はそいつの攻撃を巧く避けると反撃をした。

攻撃を受けたスコルピオワームは、クロックアップをするとその場から逃げ去って行った。

俺は変身を解くと、学校に向かって再び歩き出した。

それから暫くすると、今度は違うタイプの成虫ワームが現れた。

成虫ワームは俺の存在に気付くと、俺を襲って来たが、一人の男が現れて、

「待て。」

と、成虫ワームに言った。

男は俺に、

「助けてやるから逃げろ。」

と言うと、ヤイバーを取り出した。

すると、地面からサソリが出て来てジャンプ、男はそのサソリを掴み、ヤイバーにセットする。

ヤイバーにセットすると、男は瞬時にマスクドライダーへと姿を変える。

レジストコード、サソード。

「助けなどいらない。」

俺はそう言うつと、カブトゼクターを呼んでカブトに変身し、カブトクナイガンで成虫ワームを消滅させた。

サソードは、

「邪魔をするな！」

と言うつて、キャストオフ。

それに対し、

「キャストオフ。」

と、俺もキャストオフをし、

「cast off...change beetle」

と言う機械音と共にライダーフォームになる。

サソードはクロックアップをし、俺に接近。

そして、俺もクロックアップで応戦。

クロックアップした俺は、サソードの攻撃を受ける。

攻撃を受けた俺は、すぐさま反撃に出ると、

「やめておけ。」

と、言ったが、サソードは、

「俺は全てのワームを倒す。邪魔する奴は消す。」

と、言った。

「お前、少し落ち着け。」

親父が言っていた。

男はクールであるべき、沸騰するお湯は蒸発するだけだ。」

俺がサソードにそう言つと、

「じいやが言っていた。」

男は燃えるもの……火薬に火を点けなければ花火は上がらない。つてな。」

と言つて、変身を解いた。

俺も変身を解くと、

「何者だ？」

と、資格者に言う。

資格者は、

「神代 剣。神に代わって剣を振る男だ。」

と言つて、何処かに行ってしまった。

神代 剣……天道みたいな奴だが、一体何者だ？

サソード（後書き）

「お婆ちゃん」ならぬ、「親父」？
親父が言っていた。

お婆ちゃん、じいやと来たら、親父だ。

伝説のライダー

ネオスゼクト宇宙ステーション総本部

此処に、一人の男がいる。

「そろそろあれを使う時が来たか……。」

男はそう言つと、ベルトを取り出す。

ビストロ・ラ・サル。

加賀美と天道が話をしている。

「伝説のライダー？」

天道は加賀美に聞く。

「7年前からあるマスクドライダーシステムらしい。」

と、加賀美。

7年前？

俺は気になったので、二人の会話を暫く聞く事にした。

「ほら、最近ZECTが内部で二つの組織に別れたろ。その際、ネ

オスゼクトがそのシステムを持ち逃げしたらしいんだ。」

と、加賀美。

マスクドライダーシステムを持ち逃げ？

俺は更に聞き入った。

「それが今になって動き出したんだ。」

と、加賀美は言った。

「成る程、それで俺にそいつを止めろと？」

そう言つと天道は、

「断る！」

と、付け足した。

「何でだよ！？」

「無理なものは無理だ。」

「頼むよ、お前しかいないんだ！」

加賀美は、そう言つて天道に頭を下げて頼んだ。

しかし、天道は断つた。

ならば、

「加賀美、その件なら俺が引き受けよう。」

と、俺が加賀美に言つた。

「黒川、やつてくれると言つのか？」

「当然だ。このまま奴らを野放しにしていたら、世界は終わりを迎える。」

そうなる前に俺がネオスゼクトを潰す！」

俺がそう言つと、

「終わりを迎えるとはどういう事だ？」

と、天道が聞いた。

「ネオスゼクト。奴らはワームに荷担して世界を征服しようとする秘密組織だ。」

俺はそう言つた。

加賀美は、

「そうなのか？」

と、言う。

今自分で言つてたろ！

と、俺は思った。

所で、伝説のライダーって何！？

その事を加賀美に聞くと、

「ゴキブリをモチーフにした世界最強のマスクドライダーシステムだ。」

と言つた。

ゴキブリをモチーフ・・・そんなに最強なのか？

いや、ある意味最強と言えよう。

俺達がそう話していると、一匹の成虫ワームがサルに入つて来た。

「ほお、こんな所にまで入つて来るとは。」

俺はそう言つて、カブトゼクターを呼び、それを掴む。

「変身。」

といい、俺はゼクターをベルトに装着し、カブトに変身した。

「一気の終わらせる！」

そう言うのと、俺はカブトクナイガンでワームに連射。

数々の銃弾を受けたワームは、店の外へ逃げ出した。

俺は、直ぐに外へ出ると、ゼクターホーンを起こしてチャージし、

「キャストオフ。」

と言って、ゼクターホーンを倒す。

すると、

「cast off」

と、機械音が鳴り、マスクドアーマーがすっ飛び、ライダーフォームへと姿を変え、

「change beetle」

と、機械音を鳴らした。

「クロックアップ」

そう言うつて、クロックアップすると、逃げたワームを追った。

ワームは俺に気付くと、逃げるのをやめ、攻撃をして来た。

俺はそれをかわし、ワームにラッシュを掛け、怯んだ隙にライダーキックを食らわした。

ライダーキックを受けたワームは、爆発をして消滅した。

その直後、

「clock over」

と、機械音を鳴らし、クロックアップが解除される。

そして、俺は変身を解き、サルへと戻った。

それより、ネオスゼクト……。

早く伝説のライダーを出せ。

伝説のライダー（後書き）

本ストーリーは、もうすぐで最終話を迎えます。
それまで、じっくりご堪能下さい。

地球最後の戦い

俺は、7年前に壊滅した渋谷に来ていた。

辺りは建物一つすら無い……。皆、墜落の影響で吹き飛んでしまつたのだ。

俺が一人考えてると、

「慎吾ー！」

と、ビートルワームがやって来る。

「真理か。どうした？」

「あのね、東京全域が大変な事になっちゃつたの。」

「どういう事？」

「あれを見て！」

と、ビートルワームは空を指差す。

俺は、空を見上げると、大量のサナギワームが空中を飛んでいる所を目撃した。

「何なんだよあれ！？」

俺は思わず口にした。

真理はそれを、ネオスゼクトが放つたワーム軍団だと言う。

「ネオスゼクト目。絶対許さねえ！」

そう言つて、俺はゼクターを呼び、カブトに変身した。

「キャストオフ。」

俺はキャストオフをすると、

「cast off...change beetle」

と、機械音を鳴らしてライダーフォームになった。

そして、俺はクロックアップをし、空を飛んでるワームをカブトクナイガンで、片っ端から排除して行つた。

が、奴らはどんどん出てくる。

「くそ！これじゃキリがねえ！」

まさにその通りだ。

こんなに沢山出て来られてはキリがない。
一体どうすれば？

俺が一人考えてると、

「宇宙。こうなったら宇宙に行ってネオスゼクトを潰すしかないよ！」

と、ビートルワーム。

「宇宙？」

俺は聞いた。

「うん。ネオスゼクトは、宇宙にあるのよ。」

と、ビートルワーム。

「何だって！？」

俺は驚く。

「ね、行こうよ。宇宙。」

と、ビートルワーム。

「そんな事言われても、どうすれば？」

「ゼクト。ゼクトがロケットを開発したわ。」

ネオスゼクトを潰す為に。」

「成る程。それで行けと？」

俺が聞くと、ビートルワームは頷いた。

「分かった。行こう。」

その代わり、お前は地球に残ってやって来るワームの足止めをしてくれ。」

「解った。私、頑張る！」

こうして、俺は宇宙に行くことになった。

俺は一緒に行く仲間を探した。

と言っても、加賀美と天道しかないのは目に見えてる。

そこで俺は、二人にネオスゼクトを潰すと言う大仕事を手伝う様に頼んだ。

「そつ言つ事なら任せろ。」
と、天道。

加賀美は、

「ゼクトに宇宙に行く伝える。」
と、言った。

これでメンバーは揃った。

後は、ゼクトの了解を得るだけだ。

見てろよネオスゼクト。

俺が必ずお前らを潰す！

地球最後の戦い（後書き）

カブトがいよいよ宇宙進出！？
一体どうなる！？

カブトムシVSゴキブリ

ネオスゼクト。それは、ゼクトが内部分裂を起こし、ワームに荷担した秘密組織である。

ネオスゼクトは、ワームと共にマスクドライダーシステムを使い、世界征服を企んでいる。

最早、人類はワームの中で生きていくしか道は無いのだろうか？否、まだ希望が無くなった訳では無い。

ゼクトは、眠る時間も惜しんで研究に没頭した末、宇宙に向かう為のロケットを開発した。

「黒川君、天道君、加賀美君。準備は良いね？」
操縦士は言う。

一同は、返事をする、シートベルトを着用した。
そして、三人のライダーを乗せたロケットは、宇宙に向けて飛び立った。

ロケットは、宇宙に出ると、大気圏を突破する。
大気圏を突破すると、ロケットは切り離され、スペースシャトルだけの存在になった。

スペースシャトルは、ジェットを噴射し、地球より少し離れた宇宙ステーションに向けて飛んで行く。

それから暫くして、宇宙ステーションに到着した俺達は、スペースシャトルから降りる。

「此処が、ネオスゼクト……。」

加賀美は、そう呟く。

「無駄口を叩いてないで行くぞ。」

俺は加賀美にそう言った。

俺達は、スペースシャトルのあるドックを後にする。

ドックを後にした俺達は、細い通路に出た。

すると、数体のサナギワームが前方からやって来て、俺達の行く手を遮る。

「此処は俺が！」

そう言つて、加賀美はワーム達に立ち向かつて行つた。

俺達は加賀美に此処を任せると、更に奥へと進み、細長い通路を抜けて広場に出る。

「この先だ。」

俺がそう言い、進もうとしたが、

「待て。」

と、天道。

「何だ？」

「おかしいと思わないか？さっきのワームと言い、人っ子一人見あたららないなんて。」

「そう言われて見れば・・・そうだな。」

と、その時。

「うわぁ！」

と言う加賀美の悲鳴が聞こえた。

俺達が通路へ出ると、加賀美の変身が解けていて倒れていた。

「どうした加賀美！？」

と、俺達は加賀美に近付く。

「加賀美、何があつた！？」

俺はかろつじて意識のある加賀美に聞く。

「ライダー・・・やら・・・れた・・・。」

加賀美はそう言い、気を失つてしまう。

「天道、加賀美を頼む。」

「どうする気だ？」

「俺は、加賀美をやった奴を捜す。」

俺がそう言つと、突然と何者かに攻撃された。

俺は攻撃を受け、

「ぐはっ！」

と、呻き声をあげた。

「どうした？」

天道は聞く。

「奴が、奴が潜んでる！」

「何？」

「おい、何処にいる！？」

俺がそう言つと、

「此処だ。」

と、一人のマスクドライダーが現れた。

そいつは、ゴキブリをモチーフにしていた。

「お前、何者だ？」

「俺様だ。」

「まあ良い。そう言う事にしておこう。
加賀美をやったのはお前か？」

「加賀美？そこに倒れてる奴の事か？」

「そうだ。」

「ふん、俺がやった。」

「目的は何だ？」

俺はそう問い、

「地球征服及び、人類ワーム化計画。

それを邪魔する者は排除する。」

と、ライダーはそう言った。

「そんな事、絶対にさせねえ！」

俺がそう言つと、

「ほお、貴様も俺様の邪魔をするのか。」

と言つて俺に攻撃する。

が、俺は攻撃を避ける。

「遅い。」

と、ライダー。

「遅いか。」

俺はそう言っで、キャストオフをすると、クロックアップをした。
「これでどうだ!？」

と、俺はライダーを攻撃するが、素早くかわされてしまった。
「クロックアップせずにか!？」

俺は驚く。

「俺のマスクドライバーシステムは何だ？」

そうか、奴はゴキブリ。だから速いのか。

俺は一人納得をする。

「ふっ、俺の素早さに驚いているな。

因みに俺の早さはこんなもんじゃない。」

そう言っで、ライダーはクロックアップをした。

クロックアップしたライダーは、俺に急接近し、俺を攻撃。

俺は攻撃を受け、怯む。

は、早い!

正直、こんなに早いとは思わなかった。

クロックアップすると、コイツはかなり速くなる。

俺、コイツに勝てるのか?

すると天道、

「お婆ちゃんが言っでいた。

戦いはへそでするものだ。」

そう言っで、ライダーに攻撃をした。

「馬鹿な!？マスクドフォームのままだぞ!」

と、ライダー。

ライダーは、天道に近付き、攻撃をする。

が、避けられ、反撃を受ける。

反撃を受けたライダーは、怯んでしまった。

天道は、その隙にライダーの後ろに回り込む。

「黒川、今だ。」

天道はそう言っで、ライダーキックを要求。

俺は、

「ワン、ツー、スリー」

と、フルスロットルを押し、ゼクターホーンを倒して、

「ライダーキック。」

と、言ってからゼクターホーンを再度倒す。

すると、右足が燃え上がる。

俺は、回し蹴りをライダーに放った。

ライダーキックを受けたライダーは、ゼクターが外れて変身が解けた。

正体を見た俺は、

「あつ、あんたは！？」

と、思わず口にした。

俺が見た人物。果たして誰だったのだろうか？

カブトムシVSゴキブリ（後書き）

ゴキさん、気になりますね。

カブトVSガタック

ライダーキックを受け、ゼクターが外れて変身が解けたライダー。
俺はそれを見て、

「あつ、あんたは!？」

と、驚いて言った。

俺が見た人物。一体誰だったのだろうか？

「か、加賀美……。一体どういう事だ？」
と、俺は聞く。

「見ての通りだ。」

加賀美はそう言った。

「嘘だろ……。お前がネオスゼクトだなんて……。」

俺の発言に対し、

「嘘じゃない。」

と、加賀美。

「加賀美……。そっちの倒れてるのは誰だ？」

「それは、俺に擬態したワームさ。」

加賀美がそう言うと、倒れていた加賀美が起きあがり、成虫ワームに姿を変えた。

「天道、ワーム……。片づけてくれ。」

俺は天道にワームを片づける様頼んだ。

天道は、キャストオフをし、ライダーフォームになる。

ライダーフォームになった天道は、クロックアップをしてワームに攻撃をしながら俺から離れていった。

「教えてくれ加賀美。お前は何故地球征服を？」

「お前に教える必要は無い。」

勝負だカブト！」

加賀美はそう言うと、ガタックゼクターを呼んだ。

「変身！」

加賀美はゼクターをベルトに装着し、ガタツクになる。

「加賀美、ガタツクは何時からある？」

「7年前。カブトと一緒にだ！」

カブトが、7年前に・・・。

マスクドライダー計画は最近完成したもの・・・信じられない事だ。

「さっさと始めようぜ！」

と、ガタツク。

「加賀美・・・どうしてもやらなきゃいけないのか？」

「俺とお前は、戦う運命なんだ・・・。」

キャストオフ！」

ガタツクは、キャストオフをした。

「本気で行くぞ！」

ガタツクは、そう言ってクロックアップをする。

「クロックアップ。」

そう言って、俺はベルトのボタンを押し、

「clock up」

と、機械音を鳴らしてクロックアップをする。

その瞬間、全ての時間の流れが遅くなった。

ガタツクは、ガタツクダブルカリバーで俺を攻撃する。

俺はその攻撃を受け、身動きが取れなくなってしまった。

「本気で戦えカブト！」

ガタツクは、押されてる俺に言う。

俺は、隙を見てガタツクの攻撃を止める。

「何！？」

ガタツクはそう言った。

「いい加減に、しろおー！」

俺はそう言って、ガタツクにメガトンキックをお見舞い。

それを喰らったガタツクは、退いて怯んだ。

俺はカブトクナイガンを取りだし、ガタツクに連射する。

ガタツクは、ダブルカリバーで銃弾を止める。

「なかなかやるな。」

「お前もな！」

俺は更にカブトクナイガンを撃ち続け、ガタツクはダブルカリバーで銃弾を止める。

キリがない。

そう思った俺は、撃つのをやめ、カブトクナイガンをクナイモードにする。

「はぁーっ！」

俺はガタツクにカブトクナイガンを振り下ろす。

ガタツクは、それをガタツクダブルカリバーで止める。

「最高だぜお前。こんなに楽しめる戦いは初めてだ！」

俺はそう言っで、ガタツクに体重を掛ける。

ガタツクは、踏ん張りながら俺を押し返す。

押し返された俺は、足がよろけてしまった。

その隙に、ガタツクは俺をガタツクダブルカリバーではさむ。

俺はガタツクにはさまれ、身動きが取れない。

「これで終わりだ！」

ガタツクはそう言っで、ライダーダブルカリバーを発動させた。

その瞬間、俺は爆発を起こし、爆風で吹っ飛ばされるた。

が、被害を受けたのはそれだけでは無い。

爆風により、俺とガタツクのベルトが外れてどこかへ吹っ飛んだ！

俺とガタツクは、

「clock over」

と言う機械音と共に変身が解ける。

「まだまだ行ける！」

そう言っで、加賀美はクワガタをモチーフにした成虫ワームに姿を変えた。

レジストコード・スタッグビートルワーム

「お前も、ワームだったんだな。」

俺はスタッグビートルワームにそう言うと、キングビートルワームに姿を変えた。

「キング……。」

スタッグビートルワームはそう呟き、

「裏切り者。」

と、付け足す。

一方、天道ヘラクレスは……。

「ライダーヘッドクラッシュ。」

天道ヘラクレスは、ライダーヘッドクラッシュを発動し、頭上のワーム目掛けて飛び上がり、鋭い角でワームを貫く。

その瞬間、ワームは爆発を起こして消滅。

ワームを消滅させた天道ヘラクレスは着地をすると、

「clock over」

と、機械音を鳴らしてクロックアップを解除する。

そして天道は変身を解く。

変身を解いた天道は、広場の先のコントロールルームに入って行った。

その頃、俺はスタッグビートルワームと激闘を繰り広げていた。

スタッグビートルワームは2本の角で俺を挟み撃ちにする。

「俺はお前を倒し、ワームの王となる！」

そう言うと、スタッグビートルワームの挟む力が先ほどより強くなった。

俺は必死でもがき、やっとの思いで抜け出す事に成功した。

「ちっ」

と、スタッグビートルワームは舌打ちをした。

俺はそんなスタッグビートルワームに近付き、両手で捕まえると、頭上に放り投げた。

そして、俺はジャンプをしてスタッグビートルワームを鋭く尖った頭の角で貫いた。

身体を貫かれたスタッグビートルワームは、

「そんな・・・馬・・・鹿・・・な・・・。」

と言つて、爆発をして消滅した。

激闘の末、ついに勝利を得た俺は、人間の姿に戻ると、コントロールルームに向かった。

カフトVSガタツク（後書き）

次回はいよいよ最終話！

ネオスゼクト破壊

コントロールルームに入ると、天道がコンピュータの様なものと格闘をしていた。

「天道……。」

「黒川か。丁度良い、手伝え。」

天道はそう言った。

俺は天道の側まで寄り、天道が弄っているものを見た。

そこには、画面、キーボード、OSなど沢山の機械があつた。

俺は画面を見ると、

「成る程。」

と、一言。

「何か解つたのか？」

天道は聞いた。

「画面を見てみる。」

俺は天道にそう言った。

天道は画面を見ると、手慣れた手つきでキーボードを打って行く。

「解るのか？」

俺がそう聞くと、

「俺を誰だと思っている？俺様だ。」

この世界で優秀でNo.1の俺に出来ない事は無い。」

と、自慢げに言う。

それから暫くすると、天道は手を止め、

「これでワームが地球に送られる事は無い。」

と、天道が言った。

「やったな天道……。後は此処を破壊するだけだ。」

俺がそう言うと、天道はキーボードを操作し、画面に宇宙ステーション内の地図を出した。

「今いるのがこのコントロールルームだ。」

天道はそう言つて、地図上で赤く点滅してる所を示した。

「此処から下に降りてエンジンルームに行く。」

天道はそう言つた。

俺は辺りを見回すと、下に降りる為の階段を見つけた。

「天道、階段だ。」

「行け。」

天道はそう言つた。

「お前は来ないのかよ？」

「俺は先に戻る。そうだ、これを持って行け。」

そう言つて天道は、俺にベルトを渡すと、スペースシャトルに戻つてしまった。

「天道・・・必ず戻る。」

俺はそう呟き、階段を降りてエンジンルームに入った。

エンジンルームに入ると、一匹の成虫ワームが現れた。

俺はベルトを腰にはめると、カブトゼクターを呼んで装着し、カブトに変身した。

そして俺は、キャストオフをし、成虫ワームに攻撃をする。

攻撃を受けたワームはクロックアップをした。

それに対し、俺もクロックアップをして応戦する。

クロックアップした俺は、ワームにラッシュを掛け、隙についてラ

イダーキックを発動させると、ワームに回し蹴りを放った。

ライダーキックを受けたワームは爆発を起こして消滅した。

「clock over」

と、クロックアップが解除される。

クロックアップが解除された俺は、カブトクナイガンを取りだし、

エンジンに向かって乱射した。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

と、叫びながら・・・。

すると、エンジンは爆発を起こして炎上。

その爆風により、俺は別の次元へと飛ばされた。

別の次元に飛ばされた俺は、目を覚ますと懐かしい場所にいた。

「地球……。帰って来たんだ俺。」

と、一人呟いた。

が、そこは現在の地球では無く、3年前の地球だった。

それに気付くまでは、そんなに時間は掛からなかった……。

俺はその場で変身を解き、暫くの間佇んでいた。

するとそこへ、一人の少年が現れた。

三年前の俺だった。

「家に何か？」

三年前の俺は聞いた。

「ああ、君に用事があつてな。」

そう言つて、俺は三年前の俺にベルトを渡し、

「これを受け取ってくれ。そして世界を救え。」

今から三年後、地球にはワームと言う地球外生物が現れ、世界を脅

かす。そうなる前にお前が世界を救うんだ。」

俺が三年前の俺に言つと、

「あんた、誰？」

と、言つて来た。

「俺は、くろ……。いや……。俺は、天道 総司。天の道を往き、

総てを司る男だ。」

俺はそう言つて、三年前の俺と別れた。

ネオスゼクト破壊（後書き）

天道 総司。それは黒川 慎吾本人だった。

エピソード・おまけ

俺は黒川・・・いや、天道 総司。天の道を往き、総てを司る男だ。先日、俺はネオスゼクトの本拠地を破壊し、地球に帰って来た所だ。しかし、生きて帰ったのは、俺とスペースシャトルの操縦士だけだった。

黒川は、ネオスゼクトの宇宙ステーション内部にある動力室で、爆発に巻き込まれ、別次元に飛ばされた。それが俺、天道 総司だ。あの時から俺は、死んだと言う事になっている。

だから俺は、正体を隠して悠々と生きていく事にしたのだ。が、アイツにだけは俺の正体を教えてやった。するとそいつは、

「お帰り、慎吾。」

と言って、涙を流しながら俺にしがみついた。

「お、おい、やめろよ。」

俺がそいつにそう言っていると、

「お願い、暫くこうさせて・・・。」

あたし、貴方が帰って来るまで、ずっと独りぼっちで寂しかったんだもん。」

と言って、俺を放さなかった。

「真理・・・独りぼっちにして、辛い思いさせて、御免な・・・。」

俺はそいつに、そう言ってやった。

「慎吾・・・。」

そいつは俺の名を言う。

「真理・・・。」

俺はそう言って、そいつを強く抱きしめた。

「ねえ慎吾、私のこと・・・好き？」

真理はそう聞く。

「ああ、好きだ。俺は、真理・・・お前が大好きだ。」

俺と、結婚してくれ。」

俺は真理に、婚約を持ちかけた。

真理は当然、OKをしてくれた。

その後、俺達は結婚をし、子供を授かり、幸せを築いた。

勿論、子供はサナギワームだ。

こうして、二人は何時までも、何時までも幸せで居続けたのであり
ました。

お終い。

エピソード・おまけ（後書き）

如何でした？私が考えたネタは？
ハッピーエンドでしょ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7165a/>

仮面ライダーカブト 1st stage

2010年10月12日01時26分発行